The Japan Society for Intercultural Studies
日本国際文化学会

# 第13回全国大会プログラム

日時：2014年７月５日（土）・６日（日）

会場：山口県立大学

公立大学法人
山口県立大学

グローバル人材育成推進事業

トキメキ！ ヒラメキ！ キラメキ！
山口県立大学 国際文化学部

# 日本国際文化学会
# 第13回全国大会

## 文化を「しあわせる」－地と知を織り成す拠点としての大学

「青の太陽」　香月泰男　山口県立美術館所蔵

穴の底をはいまわるようなきびしい現実の中でも、見上げれば小さな青空に気づく。あたりが暗ければ暗いほど、ふつうは見えない昼間の星も見えるはずだ。それらをつないで「しあわせ」れば、新たな星座となるだろう。

日時

2014年
7月5日(土)・6日(日)

場所

公立大学法人
山口県立大学新キャンパス
http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/annai/gaiyo/syuuhen.html

大会プログラム・参加費・お申込み等の詳細は学会ホームページへ
http://www.jsics.org/

お問い合わせ

大会事務局
日本国際文化学会事務局
連絡先
〒753-8502　山口県山口市桜畠 3-2-1
公立大学法人山口県立大学国際文化学部事務室内
Tel:083-928-3423
e-mail: jsics@yamaguchi-pu.ac.jp

## シンポジウム　ここから始まる私の地球―インターローカル人材が拓く未来

**7/5(土) 15:00-16:00／講堂**

**★基調講演者**

**セリグマン・アダム博士**
Adam B. Seligman、ボストン大学教授、Institute on Culture, Religion and World Affairs代表、哲学・思想家、社会学者

**★演題**

**“Intercultural Exchange for Mutual Trust : Practical examples from my experiences”**
**（文化の交流を通して築く信頼関係：私の実践経験から）**
文化の対立・和解・寛容性・対話等をキーワードに、特に若者を対象としたサマースクールやThe Toleration Projectを通して相互理解を生み出す取組について語っていただきます。使用言語：英語（同時通訳有）

シンポジウム「ここから始まる私の地球」は、山口県出身の画家、香月泰男の作品からヒントを得たものです。香月泰男は二年におよぶ抑留をモチーフとした「シベリア・シリーズ」で第1回日本芸術大賞を受賞しました。

The Japan Society for Intercultural Studies
日本国際文化学会

# 第 13 回全国大会プログラム　目次


1．日本国際文化学会　第 13 回全国大会ご挨拶 …… 2

2．受付・クローク・休憩室・お弁当引渡し所・書籍の展示と販売について …… 2

3．キャンパス周辺図・情報交換会場 …… 4

4．キャンパス案内図 …… 5

5．大会会場のフロアマップ …… 6

6．バス・列車時刻表 …… 9

7．大会日程と会場一覧 ……11

8．自由論題要旨
自由論題Ａ ……14
自由論題Ｂ ……19
自由論題Ｃ ……24
自由論題Ｄ ……29
自由論題Ｅ ……32
自由論題Ｆ ……35
自由論題Ｇ ……38

9．共通論題要旨
共通論題１ ……41
共通論題２ ……47
共通論題３ ……52
共通論題４ ……57

10. シンポジウム ……62

11. フォーラム ……62

12. 100 minutes ワークショップ ……63

13. 情報交換会（懇親会と舞いの上演）……63

14. 総会 ……64

15. 日本国際文化学会年報
『インターカルチュラル 2015』（第 13 号）への投稿について ……64

## １．日本国際文化学会　第１３回全国大会ご挨拶

2014 年 7 月 5 日（土)、6 日（日）の両日、日本国際文化学会第 13 回全国大会が、「西の京 山口」の山口県立大学にて開催されます。山口県立大学での開催は初めてということもあり、スタッフ一同緊張しながらも、みなさまをお迎えする準備を着々と進めております。

今回の大会は“文化を「しあわせる」―地と知を織り成す拠点としての大学”というテーマのもと、山口県立大学グローバル人材育成事業として開催されるシンポジウム「ここから始まる私の地球―インターローカル人材が拓く未来」を柱に、多岐多様な４点の共通論題と 20 点に及ぶ自由論題が用意されており、これまでの大会同様、非常に充実した大会となることが予想されます。

加えて、明治の初期に料亭として創業し、その後山口の迎賓館として、井上馨、伊藤博文、佐藤栄作ら時代を担った人々が集った「菜香亭」に場所を移して開催される懇親会や、室町時代の守護大名大内政弘の別邸で、その庭は禅僧である雪舟が築庭したものとして、国の史跡・名勝にも指定されている「常栄寺雪舟庭」で開催される文化イベント「和ろうそくの世界」など、歴史と文化に溢れる「西の京　山口」の魅力を味わっていただける企画も進行中です。

大会当日は、山口県の PR 本部長に任命されている「ちょるる」もやって来てくれることになっています。みなさま、おいでませ、山口へ。

第 13 回全国大会実行委員長　山口県立大学附属図書館長　鈴木隆泰

## ２．受付・クローク・休憩室・お弁当引渡し所・書籍の展示と販売について

### （1）受付

事前申し込みをされた方は、受付で資料等をお受け取り下さい。事前申し込みをされてない方については、受付で大会参加費を承ります。

| | 一般会員 | 一般非会員 | 院生・学生 |
|---|---|---|---|
| 大会参加費 | 2,500 円 | 3.500 円 | 1,500 円 |
| 情報交換会 | 5,000 円 | 5,000 円 | 2,500 円 |

年会費をお支払いの場合は、以下の通りです。

| | 正会員 | 大学院生 | 学部生 |
|---|---|---|---|
| 年会費 | 10,000 円 | 5,000 円 | 2,000 円 |

**（2）名札**

大会開催中は、受付時にお渡しする名札をおつけください。事前にお弁当を申し込まれた方は、名札に印がつけてあります。お弁当引渡時に名札をお見せください。

**（3）大会事務局**

大会期間中、ご不明な点は受付にお問い合わせください。

**（4）クローク・お弁当引渡し場所**

下記の時間、F111 において手荷物をお預かりします。受取の際には、お預けの際にお渡しした番号札をお見せください。貴重品はお預かりすることができません。

7 月 5 日（土）　8:30～15:00 まで　／　7 月 6 日（日）　8:00～16:50 まで

7 月 5 日(土)は、15:00 からのシンポジウムに参加されるときに手荷物をお受け取りの上、シンポジウム会場（講堂）にご移動ください。

事前にお弁当を申し込まれた方は、F111 でお弁当をお取りください。お弁当の引渡し時間は下記の通りです。

7 月 5 日（土）　11:30～14:00　／　7 月 6 日（日）　11:30～13:00

なお、7 月 6 日（日）12:10 から 13:10 の昼食・総会時は、総会会場（F204）で昼食をお取りください。

**（5）休憩室**

F112 を休憩室、昼食室としてお使いいただけます。休憩室に茶菓を用意していますので、どうぞご利用ください。

**（6）書籍の展示と販売**

F112 において、書籍の販売と展示をしています。ぜひお立ち寄りください。

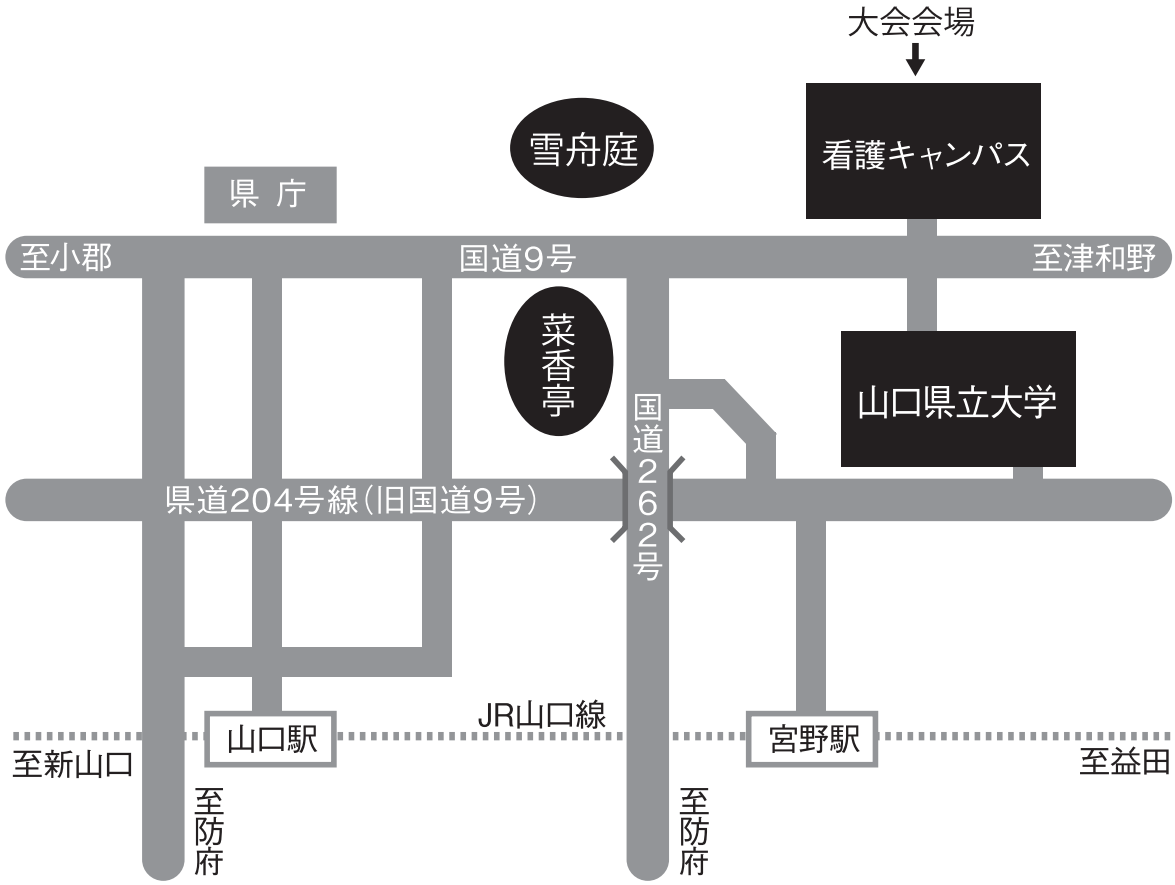
**（7）自動販売機**

お飲物の自動販売機は、F 棟 2 階から E 棟 2 階への渡り廊下（E 棟側）に一か所あります。また、E 棟を下った外側（講堂に面したところ）にも一か所あります。

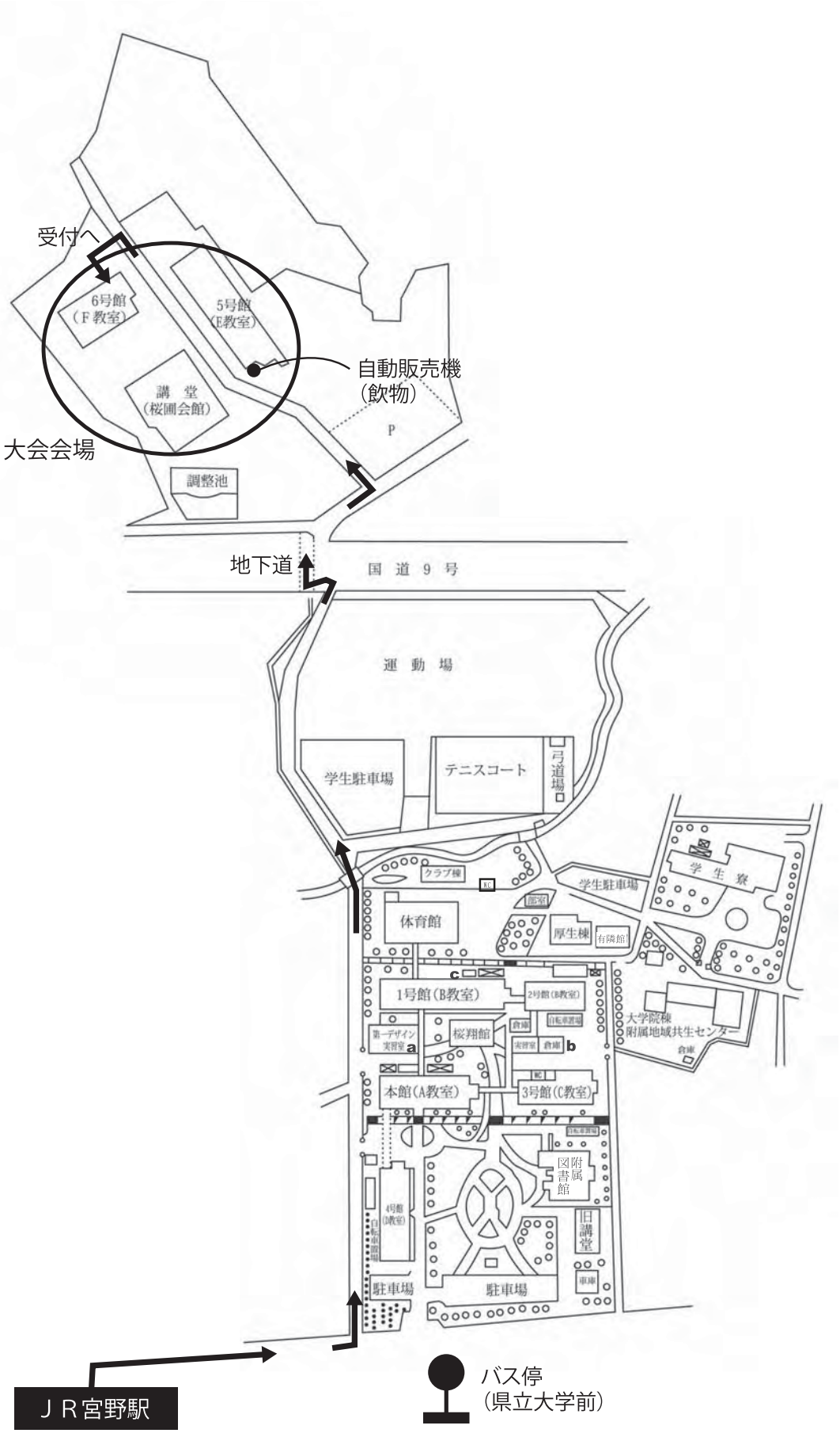
**（8）その他**

キャンパス内は禁煙となっています。

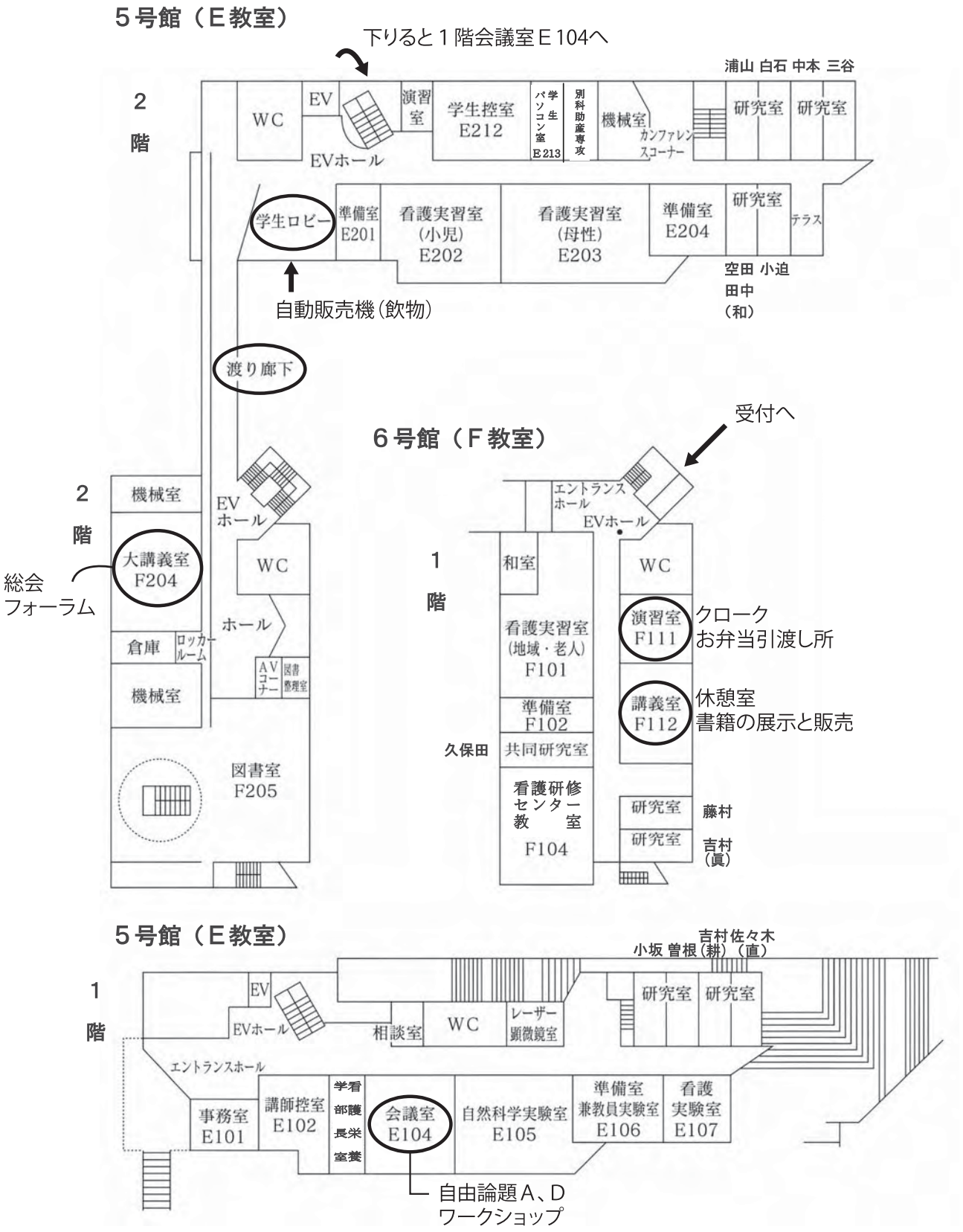
## 3．キャンパス周辺図・情報交換会場

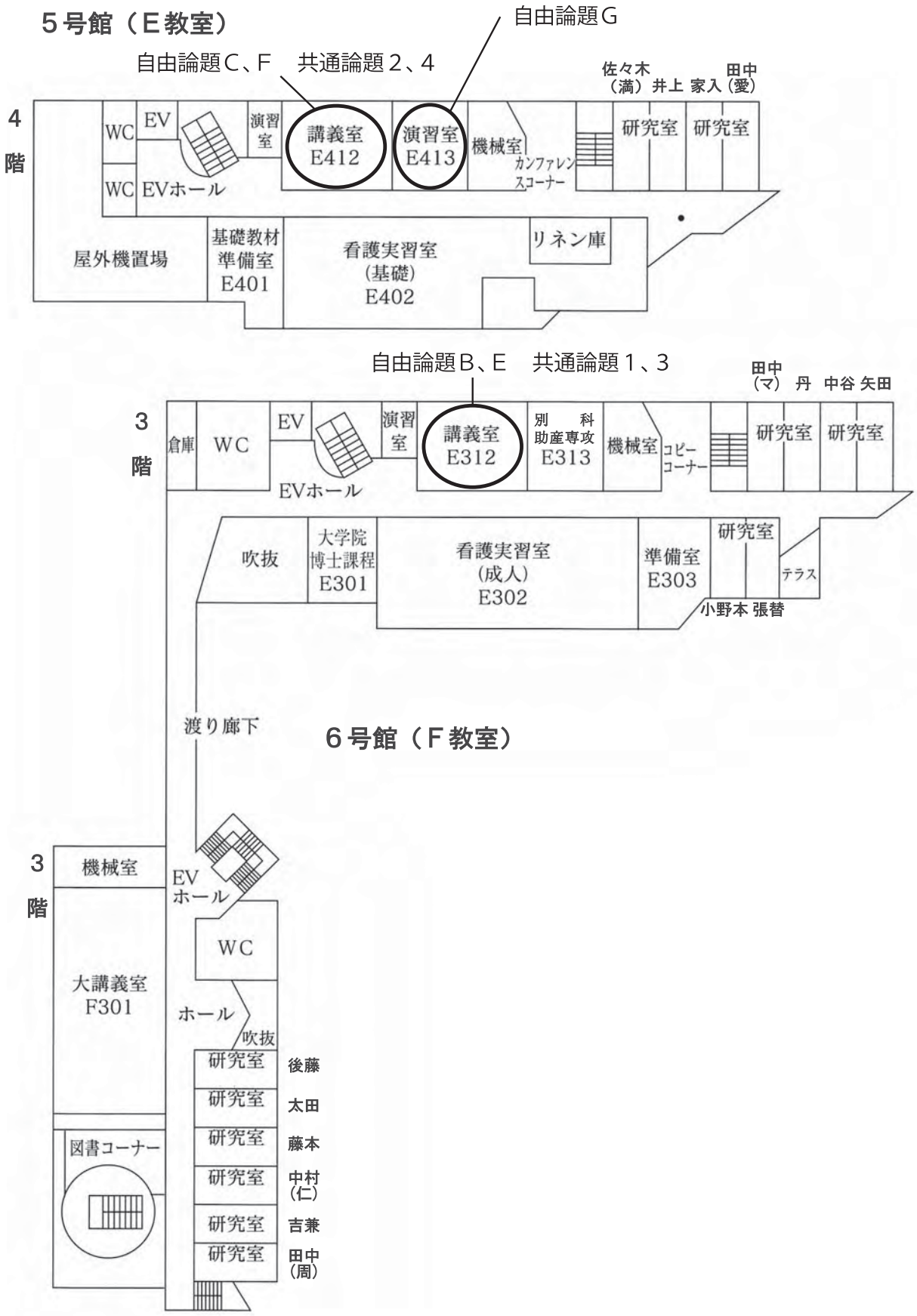


## ４．キャンパス案内図


受付へ
6号館
（F教室）
5号館
（E教室）
自動販売機
（飲物）
講　堂
（桜圃会館）
P
大会会場
調整池
地下道
国　道　9　号
運　動　場
学生駐車場
テニスコート
弓道場
クラブ棟
学生寮
学生駐車場
体育館
厚生棟
有隣館
1号館（B教室）
2号館（B教室）
大学院棟
附属地域共生センター
桜翔館
第一デザイン実習室a
実習室
倉庫
b
本館（A教室）
3号館（C教室）
附属図書館
旧講堂
4号館（D教室）
駐車場
駐車場
車庫
ＪＲ宮野駅
バス停
（県立大学前）

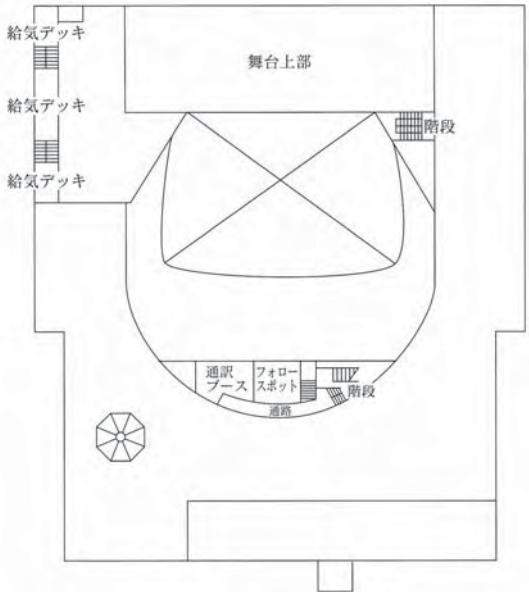
## ５．大会会場のフロアマップ



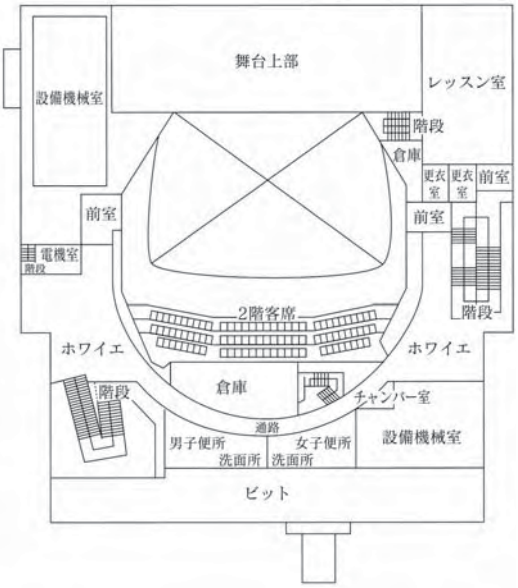

５号館（Ｅ教室）
自由論題Ｇ
自由論題Ｃ、Ｆ　共通論題２、４
佐々木（満）
井上
家入（愛）
田中
4階
WC
EV
演習室
講義室 E412
演習室 E413
機械室
カンファレンスコーナー
研究室
研究室
WC
EVホール
屋外機置場
基礎教材準備室 E401
看護実習室（基礎） E402
リネン庫
自由論題Ｂ、Ｅ　共通論題１、３
田中（マ）
丹
中谷
矢田
3階
倉庫
WC
EV
EVホール
演習室
講義室 E312
別科助産専攻 E313
機械室
コピーコーナー
研究室
研究室
吹抜
大学院博士課程 E301
看護実習室（成人） E302
準備室 E303
研究室
テラス
小野本
張替
渡り廊下
６号館（Ｆ教室）
3階
機械室
EVホール
WC
大講義室 F301
ホール
吹抜
図書コーナー
研究室
後藤
研究室
太田
研究室
藤本
研究室
中村（仁）
研究室
吉兼
研究室
田中（周）

## 講堂（桜圃会館）　シンポジウム

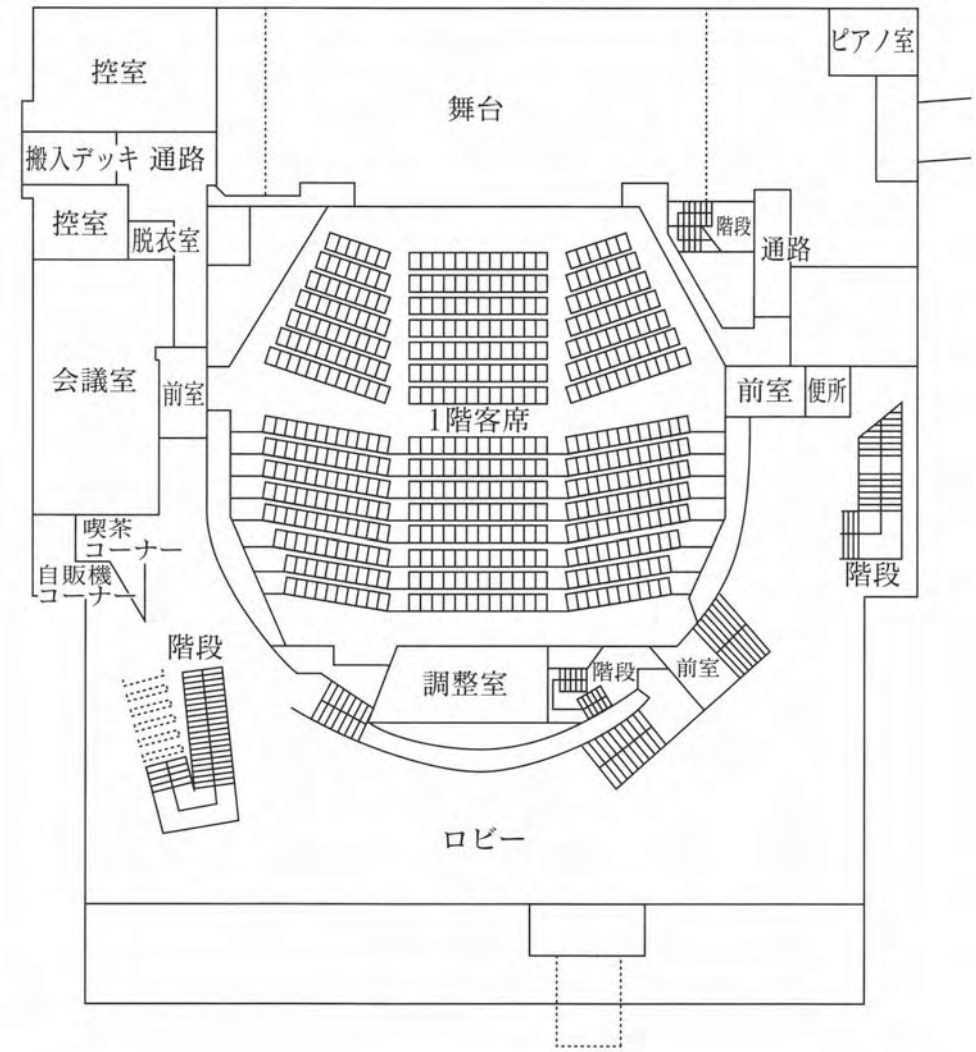
3階




2階




1階



## ６．バス・列車時刻表

**◆バス　　防長バス　（H26.4　現在）**　http://www.bochobus.co.jp

新山口駅～県立大学前まで　・・・・・約４５分

※県立大学前～看護キャンパスまで　　徒歩約１０分

| 新山口(北口)　発 | 下湯田 | 湯田温泉 | 県立大学前　着 |
|---|---|---|---|
| ７：３５ | ７：５６ | ７：５９ | ８：２２ |
| ８：１５ | ８：３６ | ８：３９ | ９：０２ |
| ８：３０ | ８：５１ | ８：５２ | ９：０８ |
| 県立大学前　発 | 湯田温泉 | 下湯田 | 新山口(北口)　着 |
| １５：４３ | １６：００ | １６：０１ | １６：２３ |
| １６：１３ | １６：３０ | １６：３１ | １６：５３ |
| １７：３４ | １８：００ | １８：０１ | １８：２３ |

**◇ JR 山口線　（H26.4　現在）**

山口線 新山口駅～宮野駅まで・・・・・約４０分

※宮野駅～看護キャンパスまで　　徒歩約１０分

| 新山口　発 | 湯田温泉駅 | 宮野駅　着 | |
|---|---|---|---|
| ７：２０ | ７：３９ | ８：０６ | 山口駅乗換 |
| ７：５７ | ８：１６ | ８：３３ | |
| ８：２６ | ８：４５ | ８：５５ | |
| 宮野駅　発 | 湯田温泉駅 | 新山口　着 | |
| １５：１５ | １５：３２ | １５：５０ | 山口駅乗換 |
| １５：４８ | １５：５９ | １６：１７ | 山口駅乗換 |
| １６：１５ | １６：２５ | １６：４４ | 山口駅乗換 |
| １７：２１ | １７：３３ | １７：５２ | 山口駅乗換 |
| １８：１１ | １８：２２ | １８：４１ | |
| １８：４９ | １８：５９ | １９：１７ | |

**※【山口市内タクシーのご案内】**

◇ おおすみタクシー　　0120-31-0860

◇ いさむや第一交通　　0120-39-1368

# 大学送迎バス

※ 事前申し込みをされた方のみとなります。

| 便数 | 経　　路 |
|---|---|
| 1 | 7/4(金)　**常任理事・理事のみ**<br>宇部空港　→　新山口駅　→　ホテルニュータナカ<br>(18:45)　　(19:15)　　(19:45) |
| 2 | 7/5(土)　**朝の送迎バス**<br>新山口新幹線口　→　湯田温泉経由→　看護キャンパス<br>( 8:00 発 )　　( 8:30 発 )　　( 8:50 着) |
| 3 | 7/5(土)　**情報交換会出席者のみ**<br>看護キャンパス　→　菜香亭(情報交換会)　→　雪舟庭　→<br>(17:50 発)　　(19:45 発)　　(20:00-20:30)<br>雪舟庭　→　湯田温泉経由　→　新山口駅<br>(20:45 発) |
| 4 | 7/6(日)　**朝の送迎バス**<br>新山口駅新幹線口　→　湯田温泉経由→　看護キャンパス<br>( 7:30 発 )　　( 8:00 発 )　　( 8:20 着) |
| 5 | 7/6(日)　**夕方の送迎バス**<br>看護キャンパス→　新山口駅経由→　宇部空港<br>(17:00 発)　……　(18:00 頃着) |

# 7．大会日程と会場一覧

**7月4日（金）**

| 時　間 | プログラム | | 場 所 |
|---|---|---|---|
| 20:00～<br>21:30 | 常任理事会・理事会 | | ホテルニュータナカ<br>（弥生の間） |

**7月5日（土）**

| 時 間 | プログラム | | 場 所 |
|---|---|---|---|
| 8:30～ | 受付 | | F棟ロビー |
| 9:30～<br>11:30 | 自由論題A<br>司会：白石さや<br>（岡崎女子大学教授） | 相原征代（佐賀大学文化教育学部非常勤講師）<br>*現代若者の「恋愛のカタチ」―男女の「バランス感覚」と「安心」感* | E104（会議室） |
| | | 北林健二（山口県県史編さん室明治維新部会専門研究員）<br>*地域素材を用いた教育カリキュラムの開発について―大学生によるプリント作成の可能性をさぐる―* | |
| | | 水谷由美子（山口県立大学国際文化学部教授）<br>*サービスデザインで生活を変える　社会が変わる　－ライフイノベーションの視点から－* | |
| | | 大和裕美子（ソウル大学アジア研究所客員研究員）<br>*「山口県長生炭鉱水没事故の追悼碑建立運動――「被害者」の立場からも受け入れられる追悼碑とは」* | |
| | 自由論題B<br>司会：寺田元一<br>（名古屋市立大学教授） | 金野誠志（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）<br>*地球市民としての自己認識――その可能性をめぐって* | E312 |
| | | 白川俊介（九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究員）<br>文化的構想としてのデモクラシー――暗黙知としての言語に着目して― | |
| | | 帆北智子（東北大学国際文化研究科専門研究員）<br>*初期近代ロレーヌ=エ=バール公権の領邦君主権：ヨーロッパにおける「主権」概念に関する一考察* | |
| | | 山脇千賀子（文教大学国際学部准教授）<br>*第二次世界大戦前後のペルー日系社会にとってのキリスト教<br>――インターカルチュラルなエージェントとしての移民・キリスト者・社会事業家* | |
| | 自由論題C<br>司会：岡　眞理子<br>（青山学院大学教授） | 呉　暁良（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程）<br>*日本における留学生受入政策の現状と課題<br>―山東省を事例とした中国人学生の留学情報受容に関する一考察―* | E412 |
| | | 関根理恵（江戸川大学社会学部現代社会学科講師）<br>*文化財保護の歴史* | |
| | | 福田州平（大阪大学グローバルコラボレーションセンター・特任研究員）<br>*フィラデルフィア万博の開催における外国の参加* | |
| | | 山崎珠菜（山口県立大学研究生）<br>文化や工芸と現代技術の融合によるモノづくりにおいての研究 | |
| 11:45～<br>13:45 | 共通論題1<br>*飯舘村再生への文化の貢献*<br>司会：若林一平<br>（文教大学名誉教授） | 基調報告：菅野宗夫（飯館村農業委員会会長、NPOふくしま再生の会理事）<br>*ふくしまの再生は人間の再生から：飯舘村から世界に発信したい* | E312 |
| | | 報告1：加藤久美（和歌山大学観光学部教授）、サイモン・ワーン（和歌山大学観光学部特任助教）<br>山津見神社天井絵復元プロジェクト | |
| | | 報告2：川村湊（法政大学国際文化学部教授）<br>飯舘村は何を失ったのか？ | |
| | | 報告3：椎野信雄（文教大学国際学部教授）<br>*国民を棄民する国家とは、どんな国家なのか？* | |
| | 共通論題2<br>*戦前・戦中期の中国をめぐるトランスナショナル・ネットワーク<br>―　ジェームズ・バートラム、松本重治、渋沢敬三　―*<br><br>司会：山内晴子<br>（早稲田大学20世紀メディア研究所・朝河貫一研究会理事） | 報告1：山岡道男（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）<br>*西安事件を取材したニュージーランド人：ジェームズ・バートラム* | E412 |
| | | 報告2：高光佳絵（千葉大学大学院人文社会科学研究科助教）<br>*戦前期の松本重治と上海におけるイギリス帝国ネットワーク* | |
| | | 報告3：飯森明子（常磐大学国際学部非常勤講師）<br>*渋沢敬三の中国をめぐるネットワーク　―　1943年訪中から戦後へ* | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 13:45～<br>14:45 | 昼　食 | お弁当引き渡し場所<br>学会誌インターカルチュラル編集委員会(14:00～14:30　E102 ) | F111・F112 |
| 15:00～<br>17:30 | シンポジウム<br>司会:斉藤　理<br>(山口県立大学准教授) | 基調講演者:セリグマン・アダム博士<br>パネラー:安渓遊地(山口県立大学教授)、セリグマン・アダム(ボストン大学教授)、安田震一(多摩大学教授)、シャルコフ・ロバート(山口県立大学グローバル人材育成推進事業総括) | 講堂 |
| 18:15～<br>19:45 | 情報交換会(懇親会) | | 菜香亭 |
| 20:00～<br>20:30 | 情報交換会(文化イベント) | 和ろうそくの世界【構成・演出】二代目 花柳寿寛<br>【出演】二代目 花柳寿寛、花柳佳枝広 他2名<br>山口県立大学学生有志(トコトンヤレ節＝男性6名、あかり＝女性6名)<br>【司会進行】花柳寿寛福<br>【演目】<br>一. 創作舞踊 五重塔<br>二. 山口県民謡 男なら<br>三. Re維新 トコトンヤレ節<br>四. 小曲 ちょうちん音頭<br>(二以外、振付は花柳寿寛) | 常栄寺雪舟庭 |

**7月6日（日）**

| 時 間 | プログラム | | 場 所 |
|---|---|---|---|
| 8:00～ | 受付 | | F棟ロビー |
| 9:00 ～<br>10:00 | 自由論題D<br>司会：植野雄司<br>（プール学院大学教授） | 安藤公門（有限会社 あったか村）<br>*タイ北部農山村地帯における衛生環境事業の実践から見えてきた未来型社会～糞尿を資源として活用する循環型社会の形成のために～* | E104（会議室） |
| | | 今井隆太（愛知大学文学部非常勤講師）<br>*福武直による40年代中国農村社会調査* | |
| | 自由論題E<br>司会：鳥飼久美子<br>（立教大学教授） | 越智淳子（早稲田大学アジア研究機構アジア・北米研究所、日韓グローバル研究所招聘研究員大岡信ことば館アドバイザー）<br>*大岡信の国際性に関する考察－その内在性と多様な顕現及び今日的意義－* | E312 |
| | | 尹 盛熙（関西学院大学国際学部准教授）<br>*翻訳字幕の語用論的機能* | |
| | 自由論題F<br>司会：木原 誠<br>（佐賀大学教授） | 大形利之（東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科教授）<br>*「インドネシアの過激なイスラーム・ウェブサイトに関する一考察」* | E412 |
| | | 廣瀬 龍(東京学芸大学大学院教育学研究科）<br>*多文化共生主義と昨今の排外主義の台頭考察－昨今のヘイトスピーチを中心に－* | |
| | 自由論題G<br>司会：佐々木英昭<br>（龍谷大学教授） | シュミット・クラウディア・カロリネ(桃山学院大学文学研究科特別研究員）<br>*東京オリンピックとおもてなしについて* | E413 |
| | | 斉藤 理(山口県立大学国際文化学部准教授）<br>*コモンズ・モデルをベースとした文化観光の展開可能性について* | |
| 10:10 ～<br>12:10 | 共通論題3<br>*造られる文化、変わる文化――映画、音楽番組、大衆演劇を事例として*<br>司会：鈴村裕輔<br>（法政大学） | 報告1：マートライ・ティタニラ（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館研究員）<br>*映画における日本の伝統芸能の引用と創造――黒澤明『乱』をめぐって* | E312 |
| | | 報告2：シェリー・ブラント（ロイヤル・メルボルン工科大学メディア・コミュニケーション学部上級講師）<br>*「ふるさと」としての国――紅白歌合戦に見る「文化の創造」と「文化的ナショナリズム」* | |
| | | 報告3：鈴村裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）<br>*外来文化の普及と定着――東京宝塚劇場の開設を事例として* | |
| | 共通論題4<br>*近代日本の対外認識――中国・モンゴルへのまなざし*<br>司会：堀内直哉<br>（目白大学教授） | 報告1：伊藤信哉（松山大学法学部准教授）<br>*有賀長雄の対外認識――日露戦争から第1次世界大戦まで* | E412 |
| | | 報告2：萩原 稔（大東文化大学法学部准教授）<br>*右翼思想家の中国認識――満州事変から日中戦争直前まで* | |
| | | 報告3：鈴木仁麗（明治大学非常勤講師）<br>*モンゴル認識の形成――財団法人善隣協会の活動を支えたモンゴル認識を中心に―* | |
| 12:10～<br>13:10 | 昼 食 | お弁当引き渡し場所 | F111・F112 |
| | 総 会（昼食時間中に開催） | ・2014年度事業案・予算案<br>・2015・2016年度理事選挙結果報告<br>・文化交流コーディネイター資格認定制度等の審議<br>・第4回平野健一郎賞授賞式 | F204 |
| 13:15～<br>14:45 | フォーラム<br>司会：岩野雅子<br>（山口県立大学教授） | 報告者： 清水 拓（龍谷大学国際文化学部国際文化学科3年）<br>奈良宏美（法政大学国際文化学部国際文化学科4年）<br>佐藤志穂（京都文教大学国際文化学部国際文化学科卒業生）<br>館野帆乃花（青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科4年）<br>岡部有紗 （佐賀大学文化教育学部欧米文化選修2年）<br>星山紗奈恵（プール学院大学国際文化学部国際文化学科4年）<br>高橋知里（山口県立大学国際文化学部国際文化学科3年） | F204 |
| 15:00～<br>16:40 | 100minutes ワークショップ<br>セリグマン・アダム博士<br>アシスト：田村瀬津子（山口県立大学助教） | 学生参加希望者30名程度（先着順）<br>聴講希望者 | E104（会議室） |

# ８．自由論題

**自由論題Ａ**

**７月５日（土）**

**９:３０～１１：３０**

**会議室（E104）**

**司会：白石さや**

**（岡崎女子大学教授）**

## 現代若者の「恋愛のカタチ」― 男女の「バランス感覚」と「安心」感

相原　征代（佐賀大学文化教育学部　非常勤講師）

この発表では、佐賀大学で学生対象に実施したカップルインタビュー調査によって明らかになった、現代若者の恋愛事情を分析する。日本の若者カップルにとっての重要なキーワードは、「男女のバランス感覚」と「安心感」である。「男が払う」という規範意識はなくなりつつあり、「全体の金額で見ると大体半分ずつ払っている」と言う回答や、「デートの場所は私が決めるけれど、何を食べるかはいつも彼が決める」など、伝統的な規範に基づかない「若者なりの男女のパワーバランス」を重要視していた。他方、多くのカップルから結婚について「今すぐにではないが、時期が来たら結婚してもよい」という回答がきかれ、「若者の保守化」や「若者の結婚観は従来とあまり変わっていない」という意見は、今回のインタビュー結果にも垣間見えた。内閣府による男女共同参画に関する世論調査（平成 24 年度）によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に「賛成」とする者の割合が 51.6%（「賛成」12.9%＋「どちらかといえば賛成」38.7%）、「反対」とする者の割合が 45.1%（「どちらかといえば反対」27.9%＋「反対」17.2%）となっている。平成１４年７月調査で賛成と反対がほぼ拮抗して以降、前回の調査までは反対が賛成を上回る結果が出ていたが、今回は賛成と反対の割合が逆転する結果となった。さらに、20 歳代の賛成の割合が、30 歳代から 50 歳代よりも多くなっており、増加の割合も 20 歳代で一番多かった。インタビュー結果はこの世論調査結果とも一致する。

相手を選んだ理由としては、「こんなに楽な相手はいないから」という意見があり、若者の一般的な傾向と考えられていた「恋愛のときめき」や「お互いの感情の盛り上がり」ではなく、「安心」感が重要視されている傾向がある。少数ではあるが「結婚は考えられません」と答えるカップルからは、「結婚を考えられない」理由が明確に示され、大学生のような比較的若いカップルの間にも、「真剣な付き合いであれば、当然結婚は考えるべき」という規範が浸透しているのだろう。

インタビュー結果を総合すると、「男が払う、男がリード」などのいわゆる男女の「伝統的規範意識」は明らかに減少しており、近年の男女共同参画推進政策による性役割や性差別に対する一定の効果は確認される。他方、以前は恋愛関係には求められなかったような「楽さ」や「安らぎ」などの価値観が学生の恋愛に対しても求められるようになり、「安心・安定」という従来の「結婚相手」に求められていた条件が、学生間の恋愛にまで共有されているのである。「新・専業主婦志向」と呼べるような専業主婦希望の女子学生の意見もあり、若者の結婚観はある意味「保守化」しているのである。日本社会の性役割分業は表面的には解消されたように見えて、実はより複雑・巧妙になって、社会の根底に存在し続けているともいえるのではないだろうか。

最後に、調査に参加した学生（河原　明日香）が、若者・学生の結婚観に関する報告をする。離婚率や、大学卒業後の離職率の高くなりつつある現代日本社会の現状と、若者の「変わらない」結婚観にズレがあると考え、それに関する佐賀大学生対象のアンケート調査も行い、その結果も含めて「若者の結婚観」に関する分析・考察を発表する。

現代日本の若者の「恋愛のカタチ」を男女の「バランス感覚」と「安心」感をキーワードに分析する。

（この発表は、佐賀大学文化教育学部の文部科学省概算要求採択プロジェクト『鍋島ルネサンス構想』関連の新規開講科目『男女共同参画調査実習』で、平成 24 年度・25 年度に実施したインタビュー報告書を基にした報告である。）

**学生報告：佐賀大学文化教育学部　国際文化課程 3 年　河原　明日香（かわはら　あすか）**

**北林健二**（山口県県史編さん室明治維新部会専門研究員）

# 地域素材を用いた教育カリキュラムの開発について
## ――大学生によるプリント作成の可能性をさぐる――

キーワード：地域学習／教育カリキュラム／プリント学習

### 1　研究の目的

地域を素材とした学習の有用性が提唱されて久しいが、とりわけ高等学校において、地域学習に関する教材を入手しにくい現状がある。発表者は、その解決の糸口として地域の大学生を人的資源として捉えることとした。すなわち、大学生を地域学習のための教材作成支援者として位置づけることができれば、高校生の感性への訴求力の高い多様なコンテンツを提供することが可能になると考えた。

### 2　研究の方法

発表者は2012年度に大学生による地域学習教材の作成を試行した。地域紹介動画を作成して高校生に視聴させるものである。その結果「受験には関係がないので興味がない」とした高校生は０名で、「まあ思う」とした者も16.2%に止まり、知的好奇心を刺激することがわかった。また「近くを通ったときに史跡を注意して見てみたい」と「思う」「まあ思う」とした高校生は88.3%に上り、高校生を自発的な学習に向かわせる点で効果的であった（N＝111）。

次に、2011年度に大学生による学習プリントの作成を試行した。概念のみを提示して自主性に任せたが、「年齢が近い人が作っているのでわかりやすい」と「思う」「まあ思う」とした高校生は70.9%と、概ね好評であった（N=110）。これを受けて2012年度に高校生によるプリント作成を試行したところ、「解説文がわかりやすい」と「思う」「まあ思う」とした高校生は83.6%に上った（N=110）。さらに2013年度には大学生を対象として教室内で完結できるプリントの作成を目指した。

### 3　結果

学生に学習プリントを作成させると、既存情報の切り貼りに終始しがちである。そこで、日常的なものの中に素材があること、自分史の中に話題を広げるヒントがあることを伝えたところ、身近な風景を手がかりに、独自性の高い多様なプリントを作成することができた。

この成果物は、視覚情報を基軸とするため感性への訴求力を高め、多様性を持つため利活用の幅を広げ、生活圏の素材であるため高校生の行動変容を促す可能性を持つ。

### 4　課題点および展望

従来は短時間かつ閉ざされた空間での実践であったため、概念把握に温度差が生じたり、記載内容が表層的になりがちであった。そこで今後は、階梯的なカリキュラム開発を計画している。その際、WEB上での情報発信も視野に入れて水平展開の便宜を図りたい。さらに、大学生にもたらす学習効果についても検証したい。

# サービスデザインで生活を変える　社会が変わる　－　ライフイノベーションの視点から　－

水谷由美子（山口県立大学国際文化学部）

**キーワード**：国際学術交流とデザイン　ライフイノベーション　サービスデザイン　SINCO Service Innovation Corner）SPL（Service Innovation Corner）　SPS（Service Design Prototyping System）

## はじめに

山口県立大学は2013年度から文部科学省の事業である地（知）の拠点整備事業に採択され、３つの事業を開始した。その内の一つに地域共生研究として県政課題に答えることが期待されたライフイノベーション研究チームが結成された。筆者はそのリーダーとして、国際文化学部のみならず、看護栄養学部、社会福祉学部など学部を超えて選ばれたメンバー（中村仁志、松尾量子、倉田研治、山崎あかね、長谷川真司）とともに、地域の産業振興や事業を起すための研究に取りかかった。

医療・福祉領域でのライフイノベーションを目指すのが目的であるが、今回は本学の学術交流協定校であるラップランド大学との交流のプロセセスで取り入れることになったサービスデザインの思考と手法を用いることにした。学際的な知見を用いて生活者、消費者、使い手、あるいは顧客という、従来はものやサービスの開発において重視されなかった存在が求める、あるいは必要とするものやことを優先する形で開発しようとするものである。

## １章　サービスデザインとは

従来はヒューマン・センタード・デザインと呼ばれていた概念を発展させたもので、現在はサービスデザインの用語にとって変わられようとしている。特に、使い手の体験価値を創造しようとすることが目的である。そこで、本研究グループは、ヨーロッパのビジネスや教育において広がりを見せているサービスデザインの思考と手法を用いた先端的な研究成果を上げているラップランド大学（フィンランド、ロバニエミ市）との共同研究を開始した。同時に世界でももっとも早くビジネスエイジェンシーを立ち上げ、特に公共空間では必須事項として実践をしているイギリスの現状も参考にした。

## ２章　ラップランド大学の SINCO

SINCO（Service Innovation Corner）は、特に視聴覚メディアを駆使した空間であり手法でもある。SINCOの空間ではロールプレイングをして、臨場感がある時空間で、ステイクホルダー（利害関係者）が、あるべきあるいはあってほしいものやサービスのプロトタイピングを行うことができる。

そこで、本学はこのSINCOに学ぶとともに、慶応大学経済学部武山政直教授の研究室とともに、共同研究をしている大日本印刷が採用しているSPL（Service Prototyping Lab）について、ワークショップを通じて学んだ。そして、本学独自の手法を構築するために、この装置をSPS（Service Design Prototyping System）と命名した。

## ３章　サービスデザインによるライフイノベーションの可能性

医療領域でのライフイノベーションとして、看護栄養学部の課題である看護師の制服の改良と新デザインの提案および福祉領域では、見守りについてのワークショプを行い、提案を目指している。看護服のユニフォームについては、専門的なメーカー（東京本社）の協力を得て、地域のデザイン、プロダクト、マーケティング、販売企業との連携を組み、具体的な共同研究を実施している。また、見守りについては行政からの依頼事項について実践するとともに、メディア産業が期待しているケーブルを使った見守りシステムとそこから広がる生活改善やメディア創造などが現在の課題となっている。

## まとめ

新しいシステムの導入であり、SPSを用いるためには、結論を導いていくためのファシリテーターの役、ステイクホルダーがロールプレイングを共有するための役者的先導者プレイヤー、そして映像や音響などを操作するオペレーターなどを養成する必要がある。現在、服飾デザイン領域のデザインを視野に入れながらも、道具やサイネージなどの必要性など、広がりのあるデザインの可能性が提案されることは意義があるが、ファシリテーターのファシリテートの難しさも浮き彫りとなっている。

# 「山口県長生炭鉱水没事故の追悼碑建立運動
## ――「被害者」の立場からも受け入れられる追悼碑とは」

大和裕美子（やまとゆみこ）　ソウル大学アジア研究所　客員研究員

周知の通り、日本の戦争責任や植民地支配の責任をめぐる問題は、いまだにくすぶりつづけている。自国中心の歴史叙述や記憶は、他国との摩擦を容易に引き起こすため、ある一つの国家・国民をいう枠を超えた記憶が歴史摩擦を克服する望ましいあり方であると考えられてきた。

他国との摩擦を克服する記憶の事例として思い起こされるのが、沖縄の「平和の礎」である。「平和の礎」は、国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで犠牲となったすべての人びとの氏名が刻まれた記念碑として知られる。だが国籍で区別することなく、犠牲者全員の氏名を刻んだこの碑であっても、他国との摩擦問題を完全に克服することができたとは言い難い。国籍で線引きすることなく、すべての犠牲者氏名を刻んだ結果、「加害者」と「被害者」の境界線が曖昧となり、「被害国」と「加害国」という立場が混同されてしまい、加害の責任の所在が曖昧となっていると受けとめられたからである。それでは、「被害者」の立場からも受け入れられる碑は、いかにして建立することが可能となるのだろうか。可能とすれば、その碑はどのような主体によって、いかなるプロセスを経て建立されるのだろうか。またどのような形状の碑となるのだろうか。本報告では、「長生炭鉱犠牲者大韓民国遺族会」の遺族との２０年以上にわたる交流を運動のもと、2013 年に「長生炭鉱水没事故犠牲者追悼碑」を建立した「長生炭鉱の‘水非常’を歴史に刻む会」の追悼碑建立過程と追悼碑を分析し、上記の問いに答えたい。山口県宇部市にあった長生炭鉱水没事故は1942 年に発生し、１８３名が命を落とした。その７割が朝鮮半島出身の坑夫であった。

**自由論題Ｂ**

**７月５日（土）**

**９:３０～１１：３０**

**Ｅ３１２**

司会：寺田元一

（名古屋市立大学教授）

# 地球市民としての自己認識――その可能性をめぐって

金野誠志（鳴門教育大学大学院学校教育研究科　准教授）

キーワード…地球市民、空間認識、自己認識、学校教育

「地球市民」になるということに対しては、地球全体の利益を最大化するために行動できる人間になるという実践的側面と、「地球市民社会」に帰属しているという実感、端的にいえば「地球人」として実感できる人間になるという認識的側面の両側面から検討していく必要があろう。しかしながら、「地球市民」になることは、一種の到達目標として自明視されて語られがちで、認識的側面からの検討が影をひそめているという感が否めない。

私たちは、他者を相互に同定し、その他者を経由した反照を受けて自己措定してきた。現存する最古の行基式日本図の一つとされる金沢文庫蔵日本図には、日本を取り巻くように描かれた鱗状の模様をもつ帯とともに、その外側に実在した「龍及国」、「唐土」、「高麗」、「蒙古」の他、実在しない異界や無名の陸塊が描かれている。蒙古来襲を期に作成されたと思われるこの日本図は、この時ここで生活していた人々の空間認識・東アジア認識とともに、外界から分かたれた一体性のある空間で生活している私たちという自己認識を表した一例といえよう。他者を鏡として生まれる自己認識から私たちは逃れられず、この認識の仕方自体は近代の国民とて同様であろう。

このような考えに立つと、「地球市民」であるという自己認識のためには、「地球市民とは違う〇〇市民」の存在が欠かせない。つまり「地球市民」としての同一性を求めれば求めるほど、「地球市民とは違う〇〇市民」の存在意義が増すジレンマに陥る。通時的な視点から、「地球市民」になる前と後を対照し自己認識を図る道も残されてはいようが、皆が「地球市民」になれるかは定かではない。

また、皆が「地球市民」になるために期待されているのが、テクノロジーの発達を背景にした市民間のネットワークの拡大による世界観の統一があるが、様々な価値が相対化されてきた中での昨今のコミュニケーションにおいては、異質だと思われる他者をあらかじめ除外し、自集団内には対立軸をもちこまず同質な者どうしでの関係性を維持しようとする様相を呈していることがうかがわれる。

真に地球市民を育成しようとするならば、ことのほか学校教育においては、これらの課題に一つ一つ応えていかなければならないのではあるまいか。

# 文化的構想としてのデモクラシー――暗黙知としての言語に着目して――

白川　俊介（九州大学大学院比較社会文化研究院・特別研究者／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・共同研究員）

キーワード：デモクラシー、言語、暗黙知、信頼

一般に、いわゆるデモクラシーの構想は、ある一定の区切られた領域、とりわけ近代以降は「国民国家」を所与として語られてきたといってよい。しかし、グローバリゼーションの進展は、こうした前提を切り崩す。政治・経済・社会の領域が脱領域化されているにもかかわらず、デモクラシーが領域的なものにとどまるとすれば、それは、権力行使をともなうガヴァナンスの正当性を揺るがすことになる。したがって、社会のグローバル化に見合う形でのデモクラシーのグローバル化が志向されるのである。

デモクラシーのグローバルな拡大という文脈で、しばしば、デモクラシーは西洋文化の中で生まれたものであり、それを異文化社会に輸出し広めることができるのか、という点が問題になる。このとき、アマルティア・センは、デモクラシーの本質を「公共的論議」（public reasoning）だとしたうえで、そう考えれば、こうした伝統は、世界各地の多様な文化のなかに見られ、デモクラシーの起源と深く結びついているという。センは、このようなデモクラシーのグローバルな起源を指摘したうえで、グローバルなデモクラシーの成立可能性を示唆している（セン『議論好きなインド人』／『正義のアイディア』を参照）。

確かに、センのいうように、「公共的論議」（より平たく言えば討議や討論）の伝統自体は、何も西洋文化の専売特許ではない。だが、そうした伝統が世界中で見いだせるからといって、それは必ずしもデモクラシーのグローバルな拡大可能性には繋がらないのではなかろうか。本報告ではこの点をデモクラシーの資源としての言語に着目して論じたい。

グローバルな討論としてデモクラシーを構想するということは、デモクラシーとはすなわち、なんらかの「普遍語」による政治だということになろう。本報告では、実際にそのように論じているダニエル・アルチブーギやアミタイ・エッツィオーニの議論を批判的に検討し、デモクラシーは次の 2 つの理由から「普遍語の政治」たりえないと論じたい。すなわち、第一に、普遍語に対するアクセスの偏差から、参加資格に不平等が生じるという点。第二に、言語は単なるコミュニケーション手段ではなく、その背景に文化や歴史を含むものであり、いわば暗黙知としての「言語文化」ないし「言語世界」の共有なしに、デモクラシーは成り立たないという点である。

# 初期近代ロレーヌ=エ=バール公権の領邦君主権：
# ヨーロッパにおける「主権」概念に関する一考察

帆北智子（東北大学国際文化研究科・専門研究員）

【発表要旨】

昨今のわが国においては，領土問題，憲法改正問題，地域主権（地方分権）問題などをつうじ，「主権 sovereignty」について考える機会がとみに増えており，権力ないしは権利につらなる重要な概念として多くの場面で用いられている。にもかかわらず，「主権」という言葉は，現在もその概念に曖昧さをもったまま使用されており，それぞれの時代において，あるいは，それぞれの国，社会，文化，ないしは文脈などによって，そこに託される意味が多岐に渡る，歴史的な概念である。

本報告では，初期近代にあたる 18 世紀ロレーヌ=エ=バール公権（以下，「ロレーヌ公権」と略記する。ロレーヌ公国は現在のフランス・ロレーヌ地方に位置する）が，とりわけ対外的に主張した領邦君主権 souveraineté：sovereignty たる主権性概念に焦点をさだめ，政治思想史的な系譜とは距離をとりながら，ロレーヌ公権が自身の統治やその権利，権力について言及した諸文書に依拠した分析をつうじ，公権による権力行使の実態に即したより現実的な「主権」の諸側面を問題化する。これにより，本報告は，現代につながる「主権」概念の生成過程の一端を明らかにし，フランス革命を画期として成立したとされる近代「主権」概念の先駆的形態について考察することで，現在進行しているさまざまな「主権問題」を歴史的に相対化しうる論点や知見の提示をめざす。

具体的には，ロレーヌ公権の統治にたいするフランス王権（パリ高等法院）の干渉によって生じた「バロワ・ムヴァン問題」を事例にとり，ロレーヌ公権がどのように自身の領邦君主権を認識，ないしは定義し，どのような論理で自身がもつ領邦君主権の正当性をフランス王権にたいして主張していたのかを析出する。

少なくともフランス史の文脈において，「主権」は，フランス王権の絶対性を正当化し，近代主権国家のひな形とされる絶対王制期の王権統治を支えた主要概念の一つであるとされるため，従来，「主権」に関する議論は王権のそれに独占されてきた。しかし，フランス王権にとっては「辺境」に位置したロレーヌのような地域権力もまた，周辺権力との相剋において自身の領邦君主権を積極的に主張し，少なくとも「近代性」という観点においてより先鋭的な「主権」論理を展開していたと考えられる。ここから本報告では，当該期におけるロレーヌ公権の歴史的特質について，政治文化史的な観点からその一端を明らかにするとともに，初期近代ヨーロッパにおける「主権」概念の一側面を提示したい。

# 第二次世界大戦前後のペルー日系社会にとってのキリスト教
## ――インターカルチュラルなエージェントとしての移民・キリスト者・社会事業家

山脇千賀子（やまわきちかこ）
（文教大学国際学部 e-mail: chica@shonan.bunkyo.ac.jp）

キーワード：
宗教と社会事業、二世の教育問題、排日対策としてのカトリック文化への接近、慈善病院における看護師としてのカトリック・シスター、第二世カトリック修養会

要旨：

本発表では、第二次世界大戦前後にナショナリズムの最前線のひとつに立たされたペルーの日系社会において、キリスト教がどのような意味を持ったのか、またキリスト者が果たした役割はどのようなものであったのか、特に教育と社会事業とのかかわりに焦点をあてて考察したい。

移民社会はナショナルかつインターナショナルな思惑が交錯する舞台である。20 世紀は、移民の母国でも移民先でもナショナリズムが渦巻いて、社会や人のあり方に大きな影響を与えてきたと同時に、インターナショナルなつながり方が模索された時代といえよう。こうした時代に翻弄された最前線が移民社会だった。

1899（明治 32）年にペルーへの第 1 回日本人契約移民が送り出されてから、第二次世界大戦前までには、およそ 3 万人の日系コミュニティが形成されていたとされる。この間には多くの二世もペルーで生まれ育ち、二世の教育問題は日系コミュニティにおいて最も関心を集める社会問題のひとつになっていた。

それは、一方では日本人移民の歴史の古い米国で顕著になった排日政策と関わり、他方では移民にとっての人生をかけた価値の問題と関わっているからである。多くの一世は錦衣帰郷を目標として、ペルーを永住の地としては考えていなかったが、ペルーでの生活が長くなるほど二世のペルー社会への同化がすすむ事態となり、二世といえども「日本人」として育ってほしいという親の希望は現実によって裏切られる事態となってきていた。二世の成長が進んだ 1930 年代は、ペルーと日本のナショナリズムの高揚のはざまで、日系社会は自らのインターナショナルなあり方を教育面で模索することになる。その試金石のひとつがキリスト教だった。

ペルーは 16 世紀にカトリック両王のスペインにより植民地化がされて以降、カトリック教会の原理が公的組織のあり方のみならず、個々人の生活と人生のあり方を規定するほどの影響力をもってきた国である。1821 年の政治的な独立の達成によって「ペルー共和国」として、政治的・経済的権力をカトリック教会から世俗的権力へと移行させる新たな国家づくりが始まるが、実際の世俗化の進行にはそれなりの時間が必要だった。教会権力と国家権力は微妙な駆け引きを続けてきた。

では、このような環境の中で、日系社会はカトリック教会とどのような関係をもつことになるのか。発表では、代表的なキリスト者の紹介と考察を行いたい。

**自由論題Ｃ**

**７月５日（土）**

**９:３０～１１：３０**

**E412**

司会：岡　眞理子

（青山学院大学教授）

# 日本における留学生受入政策の現状と課題
## ―山東省を事例とした中国人学生の留学情報受容に関する一考察―

呉　暁良（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程）

日本政府は2008年に、日本への留学生を2020年までに30万人に増やすことを目的とし、「留学生 30 万人計画」を発表した。この発表により、「各大学等の留学情報発信や、日本留学フェア等多様な方法による留学情報の提供の取組を推進」、「在外公館、独立行政法人の海外事務所、大学などの海外拠点が連携して、海外において、日本留学に係る各種情報を提供」など、留学する前の情報発信が留学生受入政策の重要な一環とされた。しかし、これまでに留学生の留学前の情報取得や留学準備に関する研究がほとんど行われていない。

そこで本研究は、「留学生 30 万人計画」に焦点を当て、この政策に対する留学情報の発信に関する課題と現状を明らかにするとともに、留学生（中国人）が日本留学情報をどのように取得しているかを把握し、今後、日本留学における日本政府をはじめとする各機関の留学情報発信の在り方を検討した。

研究方法としては、「留学生 30 万人計画」と渡日前の中国人留学生の動向に関する先行研究を考察した上で、山東省における日本語学校 5 校へのフィールドワーク調査、日本学生支援機構から日本留学促進資料公開拠点に指定された山東省図書館の訪問、在日中国人留学生へのインタービュー調査等を行った。その結果、中国の日本語学校で発信される留学情報は主に日本の日本語学校への留学情報であること、日本留学促進資料公開拠点としての山東省図書館は留学に関する資料が古く、継続的に日本から送られていないこと、さらに渡日前により正確で質量ともに充実した留学情報の提供が必要であることが明らかになった。

本研究の結果は、中国山東省の事例によるものだが、中国からの留学希望者が中国側と日本側 2 つの日本語学校を経るという時間的、経済的負担を強いられずに日本に留学できるルートを開いていくこと、またより簡単に日本留学の情報にアクセスできるような留学情報サービスを提供することの重要性を示唆した。

# 文化財保護の歴史

関根理恵（江戸川大学社会学部現代社会学科　講師）

Key Word：文化財保護、戦争、法令政策、中立尊重

発表要旨

本発表では、文化遺産保護に関する国際政策における法令政策による施策・措置の歴史的経緯について論ずる。

国際間における文化財保護に関する法令は、ウェストファリア条約（1648 年 10 月 24 日調印）から始まる。本条約は、カトリックとプロテスタントによる宗教戦争の 30 年戦争の終結のために締結された条約である。本条約では、将来に対する国家間成文合意の必要性が唱えられた。同時に、文化遺産保護の措置として、戦前状態への復旧措置がとられ、古文書館（可動・不動遺産）の回復、分捕美術品（可動遺産）の復旧が行なわれた。ここで注目したいのは、この背景に、グロティウスが 1625 年に唱えた「戦争と平和の法」の影響があったことである。グロティウスは、戦争に於いて捕獲した分捕品の取得権、掠奪、奉納された敵産、捕虜の財産、捕獲物に関する緩和政策について言及した。

その後、1740-1748 年のオーストリア継承戦争を経験し、ルソーが藝術と科学論説で、公共と私有財産の保護、社会契約に基づく近代民主主義国家の原理、本源的な自由と危機、自然と社会に由来する不平等の起源について説いた。この主張は、権利保護の観点から、非戦争用公共物と私有財産（可動遺産・不動遺産）の保護に対する措置であり、藝術的価値の高い文化遺産保護の提唱であった。

ルネッサン時代に入ると、古典復興の気運とともに私有財産へこだわりから多くの贈与売買が行われ、宗教改革期には、教義的動機にもとづく文化財の積極的改変および処分が行われた。このことから、文化財保護に関する総合的な文化政策をとることが難しい時代であったことがわかる。一方で、18 世紀半ばには、啓蒙主義に科学技術が取り入れられ、化学および物理学の成果が文化財保護に応用され始めた。1748 年のポンペイ遺跡の発見などでも、考古学的発掘調査に科学技術成果が取り入れられ、多量な成果があげられる一方で、貴重な文化財が盗掘され、流出文化財の問題が起こるようになった。その結果、文化財の指定および登録が行なわれ、専門官が設置されるシステムが確立した。

# フィラデルフィア万博の開催における外国の参加

福田州平（大阪大学グローバルコラボレーションセンター・特任研究員）
連絡先：shuheyf@glocol.osaka-u.ac.jp

キーワード：フィラデルフィア万博、日本、中国、展示、人種

要旨

19 世紀、西欧の経済力が頂点に達しつつあった時期に、西欧を中心として万国博覧会ははじまり、そして開催された。

経済的には着実に力をつけつつも、未だ「半開」のイメージをもたれていたアメリカが、その建国百周年を祝うために行われたイベントこそ、1876 年のフィラデルフィア万博だった。フィラデルフィア万博は、国際博覧会であり、19 世紀初頭にフランスで行われたような内国博覧会ではなかった。アメリカ以外の国の参加が、決定的に重要だった。建国の理念を厳格に解釈するもの、あるいはナショナリストたちが、フィラデルフィアでの博覧会にヨーロッパ諸国を招くべきではなく、内国博覧会的なものとすべきと主張していた。しかし、フィラデルフィアでの博覧会を「国際的」にすべきだとする意見が大勢を占めるようになった。非常に多くの国々が、グラント大統領の招待状に応じている。そして、このフィラデルフィア万博で報告者が注目するのは、アメリカ以外の多数の国が参画している点である。このことは、アメリカの輸出拡大に影響を与えたということも重要だが、本報告において重要なのは、外国のフィラデルフィア万博参加が「アメリカにはじめて世界のパノラマ的光景を与えた」ことである。そして、特に注目すべきことは、アジアから日本と中国がこの万博に参加していることである。つまり、日本と中国の双方が、アメリカの民間主導といえども国家的な規模にまで膨れ上がり、大統領の招待状まで発行されたイベントに公式に参加していることである。

しかし、日本と中国のアメリカでの評価は、対照的なものだった。たとえば、当時出版されたガイドブックの一つは、「日本（の展示）は（中国の展示の）隣である。彼らは自分たちの目が吊り上がった隣人に優っているのは明らかだ」と紹介している。フィラデルフィア万博を通じて日本の美術品がアメリカ広く認められるようになり、以降、アメリカでの美術とデザインへの影響が強くなったといわれている。しかしながら、留意すべきことは、中国と日本の展示物が置かれた本館では、人種に基づく展示の配置が企図され、それは実務的な都合により貫徹されなかったものの、ある程度実現されていることである。この展示意図の背後には、アングロ・サクソンの優越性のもとに世界は導かれるとする考え方があり、実際に多くのアングロ・サクソン国家が褒賞を獲得し、そして本館でも中心的位置にきていると指摘されている。中国と比較した日本の高評価は、結局、フィラデルフィア万博で示されようとしていた人種的な階梯の中での、あるいは文明（アングロ・サクソン）が野蛮を導くといった「進歩」のイデオロギーの中での評価であると思われる。

# 文化や工芸と現代技術の融合によるモノづくりにおいての研究

山崎珠菜（山口県立大学研究生）

近年、急激な成長を遂げているAdditive Manufacturing Technology(付加製造技術※1 )によって、モノづくりの可能性が大きく広がった。様々な技術進歩に伴い、生活様式も変わりつつある。その中で、日本の伝統的な文化や手工業などが衰退傾向にある。本研究では、そのような手工業や文化を守るための現代技術の応用方法を提案する。

今回筆者が注目したものが、和菓子の文化である。一部上生菓子や落雁、干菓子などの製造には、木型が用いられる。これは、職人の手作業で制作されているもので、伝統工芸にも指定されている。しかし、近年では落雁や上生菓子の需要が低下していることなどが起因し、菓子木型職人が減少している。この職人の技術の継承のために、木型の需要を高めることができないかと考え、今回の制作に至った。

江戸時代から親しまれている落雁や上生菓子の形は、決して目新しいものではない。しかし、それらの形は日本ならではの季節の捉え方や色彩の感覚など、日本らしさをよく表しているものだと、１年間の留学を経て改めて感じることができた。このことから、和菓子の形の美しさを海外に広めることで、国内での再認識にもつながるのではないかと考えた。

海外へ和菓子の文化が普及しない理由として、味覚の違い、用途の不明瞭さ、消費期限などが挙げられる。これらを考慮して、和菓子の文化を異素材で表現出来ないかと考え、磁器制作を試みた。

磁器制作を行うにあたって、表面的に和菓子を模した形の磁器を制作するのではなく、和菓子の背景にある、菓子木型の文化を活かしたモノづくりを行った。菓子木型から直接磁器を制作することは困難であるため、今回Additive Manufacturing Technologyを活用した。このことで、菓子木型を用いた磁器制作を可能にした。それだけでなく、このことは文化をデータとして保存するという観点でも、今後様々な分野で応用が期待できる。

Additive Manufacturing Technologyの使用方法が模索されている今、この技術の使用法によって文化を守ることにつながる事例があるということを、この作品を通して提案していきたいと考える。今後、菓子木型だけでなくその他の文化にも着目し、現代技術と工芸を融合することで、現代の生活様式の中での技術の継承の方法を研究していく所存である。

※1　３Dプリンタという用語で広く知られている。３次元でデータを作り、材料を積層して３次元の造形を作り出す技術

**自由論題 D**

**７月６日（日）**

**９:００～１０：００**

**会議室（E104）**

**司会：植野雄司**

**（プール学院大学教授）**

# タイ北部農山村地帯における衛生環境事業の実践から見えてきた未来型社会
## ～糞尿を資源として活用する循環型社会の形成のために～

有限会社あったか村　　安藤　公門（あんどう　きみと）
E - mail　ando-maipenrai@nifty.com

キーワード
タイ北部　モン族　糞尿資源化と循環型社会　国際支援　社会と技術　未来型社会

農山村地帯に最適な便所のシステムはなにか。1993 年結成以来、タイ国パヤオ県で山岳少数民族モン族の自立支援を行っている NPO 法人シャンティ山口は、1998 年、衛生環境問題に直面した。それを明らかにするために、2002 年以降水処理専門家として発表者も参加し、日本の伝統的な技術である「肥溜めと畑の知恵」を適用した実践・研究をはじめた。そこで、糞尿は廃棄物として処理する対象でなく資源として活用するものであることを学んだ。その結果を踏まえ、海外支援における実践例として、技術的問題とこの事業に携わった諸集団の意思と行動を検討し報告する。そして、循環型社会の形成に向かって、エネルギー多消費・糞尿資源廃棄の都市型下水道の転換を促したい。

ラオス内戦によってラオスから難民としてタイに移ったモン族は、タイ政府の定住化政策で平地に居住し、人口の増加にともなって衛生環境問題が浮上した。

NP0 法人シャンティ山口は、日本の江戸期に確立した「肥溜めと畑の知恵」を「嫌気性処理と土壌還元」と今日的に認識し、①安全で衛生的　②現地で容易に入手できる資材　③村の住民が工事可能な方法　④容易な維持管理などを基準に設計した。そして、個人宅など自己資金で５件、2007 年からは地球環境基金などの助成で５件（公園、保育所など)、計１０件の工事を行った。実験を経てメタンガス収集装置を設置し、燃料として保育所の台所で安定的に使えるようになった。このことが、「糞尿は資源である」という視点を大きく押し開いた。

実現の過程は、「自分たちのトイレとして参加する村の人々」「現地のモン族の仲間のスタッフ」「現地の必要な課題を優先するシャンティ山口」の協働が、大きな役割を果たした。また、「村の中に格差を生む原因となる機械は導入しない」「人手は村で負担する」という村の総意と実践は、社会と成員の幸福、社会と技術、地域の自立について、貴重な示唆を与えるものとなった。

そこで築きあげた絆を基礎に、2010 年度からは、遺伝子組換えトウモロコシ栽培と対峙しているホイプム村（５０世帯３００人）の村全体の衛生工事を 3 年計画で完成させた。本報告は、その初期の過程で学び確立した指針の論点整理を行い、未来型社会の可能性を探るものである。

# 福武直による４０年代中国農村社会調査

今井　隆太（愛知大学文学部非常勤講師）

報告要旨

戦後日本の社会調査を、農村民主化の手段として推進した社会学者・福武直の出発点となった、戦時下中国社会調査に焦点をあてる。

日本の社会調査史を振り返るとき、ことにその戦前と戦後とを分ける視点に立つとき、顕著な特徴として、思想、学問の自由が認められた戦後、社会学者による学術的調査が盛んになったことがあげられる。

では、戦後の学術調査は、どのようにして準備されたのだろうか。その答えのひとつが、満洲国を含む、中国大陸の占領地域で実施された中国農村調査にある。中国大陸の農村調査は、殖民地行政のため、満鉄調査部が担った。そこには、戦後京都大学に移る清水盛光のような家族社会学、および組織論研究者が含まれていた。一方、東京大学からは戸田貞三、林恵海、今井時郎らが参加し、調査助手として福武直も加わる。1940 年のことである。当時、若手研究者だった福武直は、興亜院の委嘱を受けた「対支文化工作」の一環として、中国農村社会調査に従事し始めた。学生時代、ドイツ文化社会学に惹かれ、理論研究に志したが、後年の彼は社会調査者、あるいは調査グループの偉大なオルガナイザーとして名を残すこととなる。

当時は日本の社会調査の、同時に社会学の転換期だった。戦後のアメリカ社会学受容が、単に占領の余波であったのみならず、必然性をもっていたとみるならば、直前期の状況は重要である。社会調査の大規模な展開は、戦後日本社会学の大きな特徴であり、またそれはすぐれて現代的なトピックでもある。

調査者が一人で現地に入り、素手で調査する手法から、システマティックな方法へと、調査は試行錯誤を辿る。この経験が戦後、福武の変貌を促した。対象は社会学であるが、ひろく文化論的な関心を呼び覚ますことができれば、と考えている。

**自由論題 E**

**７月６日（日）**

**９:００～１０：００**

**E312**

**司会：鳥飼久美子**

**（立教大学教授）**

# 大岡信の国際性に関する考察－その内在性と多様な顕現及び今日的意義－

越智淳子（おちじゅんこ）　（早稲田大学アジア研究機構アジア・北米研究所、
日韓グローバル研究所招聘研究員、大岡信ことば館アドバイザー）

キーワード：翻訳及び交流における両方向性と多様性、海外詩人たちとの連詩、
時代背景と今日的意義

発表要旨：

戦後の現代詩を代表する詩人大岡信が、詩作品を超えて、広く一般人にも影響を及ぼしてきたのは 80 年代から朝日新聞紙上で掲載された「折々の詩」と言えよう。この連載を通して、大岡信は、日本の古典詩歌から現代短歌、俳句まで網羅する視座の広大さと知識の深さ、そして詩人としての鑑賞と選択眼が高く評価され、大岡信のイメージは、現代万葉集の編者そして日本の古典的詩歌の優れた案内者と見られるようになっている。それ自体、間違いではないが、大岡信のもう一つの重要な一面である国際性については、必ずしも、正確にかつ一般的に認識されているとは言い難い。その要因のひとつは、日本における英文学者や仏文学者、露文学者などのいわゆる外国文学研究者の分類に大岡信は収まりきれないことである。歌人（大岡博）を父に持ち、幼少期から日本の伝統詩歌に接してきた大岡は、東大国文科の学生でいながら、もっぱら仏文学の授業に出ていた等、詩人という実作者特有の個性的な興味の選択を経て、多彩な芸術的展開を実現している。また、中学時代に同人誌を始め、外国文学を原書で学ぶなど早熟な成長過程で、精神のありように早くから国際性を内在させるに至っていた。言語では英語、フランス語の詩、文学、美術書を翻訳し、自由に対話し、国際詩祭への参加、各国の詩人、芸術家らとの深い友情をはぐくむなどその交流の形態は多彩、多様である。また、大岡の特徴的なことは、海外作品を日本に紹介すると同時に日本文化（詩歌）を発信するという両方向性を常に維持してきたことであり、この意義は極めて大きい。

その交流の具体的成果の一つが海外詩人との連詩であり、ドイツ、米国、フランス、フィンランド、オランダなど、言語の翻訳という困難を超えて実践し、多大な成果をあげている。中でも最大の成果は、詩は個人で書くものという西洋の個人主義に対して、日本詩歌の伝統である協働作業である連歌、連句の伝統を国際的に普遍化した事実であろう。大岡信の国際性、特にその内在性について考察することは、西洋化と近代化が同一であったこの近代を超えるもの、更に普遍的な方向性を展望し得るという今日的意義もはらんでいる。

# 翻訳字幕の語用論的機能

尹　盛熙（ゆん　そんひ）　（関西学院大学国際学部　准教授）

キーワード：翻訳字幕、助詞止め、省略、圧縮

発表要旨：

本発表の目的は、日本語における「翻訳字幕（以下、字幕）」の持つ形式的特性を観察し、その語用論的機能を分析することである。字幕のように、ある種の制限による情報の取捨選択が行われる言語テキストは多数存在するが、その一つである字幕を取り上げて考察することは、日本語における情報の取捨選択及びその言語的実現の原理を探る土台作りとしても有意義であると考えられる。

字幕とは、日本語以外の言語で提供されるコンテンツを日本語母語話者が理解できるよう、発話内容などの一部を翻訳して画面上に表示した文字列である。字幕は、1行10文字・最大2行という文字数の制限により、発話を含む全ての情報を字幕化することができず、必然的に多くの発話が省略された、圧縮度の高い形式となる。

本発表では、米国のテレビドラマのDVDで提供される日本語字幕を分析の対象とし、字幕独特の文体が持つ形式面の特性からその語用論的機能を考察した。その結果、字幕においてはいわゆる「助詞止め」の文末形式が一般的な話し言葉の会話文に比べて頻繁に用いられること、またその形式が特定の場面・ジャンルでより頻繁に用いられることにより、一定の語用論的機能を果たしていることが明らかになった。

「助詞止め」とは、例えば「初めて出会った時のことを？」（「～を覚えているか」の意）などのように、文の最後に位置する述語を省いて、文を助詞で終わらせるというものである。助詞止めの形式に関しては、字幕同様、圧縮度の高い言語形式である新聞見出しや新幹線の車内ニュースを分析した先行研究の中で、単語省略の一パターンとして取り上げられており、文字数の制限を満たすための効果的な手段であることが指摘されている。しかし、文の構造を決めるという極めて重要な役割を担う述語を省略することは、話し言葉の会話文を含む通常の文章ではかなり限られている。一方で助詞止めの形式は、字幕が用いられたコンテンツの内容によって使用頻度に偏りが見られ、サスペンスやミステリーなど、緊迫感の高い場面で多数観察された。これは助詞止めの形式がその圧縮性から簡潔な印象と強いインパクトを与え、視聴者側の緊張を高める働きをするためであると考えられる。このことから、字幕のように情報の圧縮度の高い形式では、単に情報を省くだけでなく、欠けている情報の推測・捕捉を容易にするための語用論的効率性も求められることが分かる。

**自由論題Ｆ**

**７月６日（日）**

**９:００～１０：００**

**E412**

**司会：木原　誠**

**（佐賀大学教授）**

# インドネシアの過激なイスラーム・ウェブサイトに関する一考察

大形利之（東海大学　国際文化学部　国際コミュニケーション学科　教授）
メールアドレス　oogata@tspirit.tokai-u.jp

キーワード　：　イスラーム　ウェブサイト　テロリズム

## 発表要旨

本発表ではまず、インドネシア国内で起きているイスラームに関連したテロリズムの現況を説明し、次に同国のウェブサイト上で氾濫する過激なイスラーム思想、ジハード（聖戦）サイトについての考察を紹介する。

インドネシアにおいてウェブサイトの自由な運営や配信は政治体制の転換と大きな関わりがあった。同国では 1998 年 5 月に独裁政権が崩壊し、民主化が始まった。民主化とともに国民には言論の自由が取り戻されたのだが、イスラーム過激派にもその自由がもたらされた。2002 年に世界的に有名な観光地バリ島で爆弾テロ事件を起こした過激派グループが逃亡先のマレーシアからインドネシアに帰国し、テロ活動を始めたのは独裁政権崩壊後のことであった。彼らはイスラーム教徒が数多く暮らす同国を含む、東南アジアの広域にシャリーア（イスラーム法）を導入し、その下でイスラーム国家の建設を進めようと考えた。

折しも、彼らの活動はウィンドウズ・マシーンを用いたインターネットの普及が世界中で急速に始まった時期と重なった。インターネットの普及によって、紙媒体の新聞やテレビで情報を得る時代から何事もウェブサイト上からリアルタイムで情報が探せ、得られる時代へと世界は大きく変わっていった。インドネシアでもインターネットの利用は拡大した。同国は ASEAN（東南アジア諸国連合）内でのインターネット利用者人口が最大である。大小数多くの島々から成り、物流にコストがかかるインドネシアにあって、日進月歩で技術進歩を続けるインターネットを用いた情報発信は、イスラーム過激派が利用するに最適のツールになった。ジハードへと若者を誘うサイトも急増した。そうした中から本発表ではウェブサイト上から無料ダウンロードできる過激派雑誌『タウジ』について紹介する。

厳しい法律によって過激なイスラーム・ウェブサイトを規制したり、ブロックすることにインドネシアでは反発が強い。政府も国民も 15 年程経た民主化の流れに逆行することを嫌い、近隣のシンガポールやマレーシアのように国内治安法（ISA）を導入することも考えられない状況にある。

結論として、取り締まりに当たる政府にとっては当面、言論の自由に苛まれつつ、正しいイスラームの教えを普及させていく教育活動を粘り強く進めていくしかあるまい。

# 多文化共生主義と昨今の排外主義の台頭考察
## －昨今のヘイトスピーチを中心に－

廣瀬　龍　　東京学芸大学大学院教育学研究科（修士課程）

Key words:　多文化共生社会、ヘイトスピーチ、排外主義者

日本政府が国際化政策・グローバル化を唱えてから30年近くになるが、国際社会における新自由主義経済の弊害として社会格差が広まり、進む競争主義とともにグローバル人材を重んじる多文化共生社会が展開された。その中で閉塞感や社会への不満者などがインターネットを通して繋がり、昨今の歴史・政治問題になっている在日コリアンやその文化に対する当て付けを通して憂さ晴らしをするヘイトスピーチが台頭し始めた。そのヘイトスピーチは激しい差別攻撃はもちろん、2014年4月20日にはナチスドイツの「アドルフ・ヒトラーの生誕125周年記念パレードと総統閣下の名誉回復デモ」までが日曜日の白昼の池袋で展開された。彼らの主張や行動は必ずしも一貫性があるわけではなく、社会に対する不満を間接的ターゲットを設けることでその鬱積を晴らしている。その際、自分らの保身用として「愛国心」や「天皇崇拝」などを掲げながら好き勝手な行動を行っているといえる。この発表では昨今のヘイトスピーチの台頭とその動きについて考察し、その背景にある諸問題について考えてみる。

日本には現在、200万人を超える外国出身の移住者が住んでおり、2006年には総務省が「地域における多文化共生推進プラン」を策定し、日本の多文化共生社会化への動きも活発になっている。また、韓国とは2002年のワールドカップ共催から韓流ドラマやK-POPが日本の茶の間を賑わせ、日韓相互関係が緊密になって行った。だが、過度な韓流文化の紹介などに違和感を覚える人々が増加する中、日韓両国の歴史的・政治的葛藤が生じ、いまや両国間の溝は深まるばかりである。バブル崩壊後の経済的・社会的不安から「嫌韓・嫌在日コリアン」へとその不満の矛先が替えられ、ネットを利用した排外主義運動への動きが拡大するが、中でも「在日特権を許さない市民の会」（通称「在特会」）による東京や大阪・京都・福岡など、日本各地でのヘイトスピーチが繰り返されている。一部のメディアやSNSでは韓国や在日コリアンの政治や文化を揶揄しつつ、強い自民族優越主義を促している。国境がますます低くなって行くグローバル社会における今後のあり方を、昨今のヘイトスピーチを通して考察する。

**自由論題 G**

**７月６日（日）**

**９:００～１０：００**

**E413**

司会：佐々木英昭

（龍谷大学教授）

# 「東京オリンピックとおもてなしについて」

Schmidt Claudia Caroline（シュミット・クラウディア・カロリネ）（桃山学院大学文学研究科 特別研究員）
SchmidtClaudia1@gmx.at

**キーワード**: おもてなし　東京オリンピック　マスコミ　日本社会

## 研究動機

本研究の出発点は、発表者の博士論文である。博士論文では「21世紀の日本における茶 ー そのあり方と意義」について研究し、その中でもおもてなしに注目した。「茶のおもてなし」という茶の一つの側面から研究を行ったが、現在においてはおもてなしの概念が大きく変容しつつあることが分かった。そのため、日本におけるおもてなしの現在のあり方ついて、研究課題になった。この課題についての今までの研究成果はVSJF（Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung e.V.、現代、日本社会科学会）の学会誌のためにも論文を作成した。研究についてさらに深めるために、発表の場で討論し検討するつもりである。

## 要旨

2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が2013年9月7日に決定された。そのときから、日本のマスコミは「おもてなし」という言葉を、主にオリンピックとの関連で頻繁的に使うようになり、「おもてなし」というトレンドワードが生まれた。本研究の目的は、その現象の要因を探ることである。IOC（国際オリンピック委員会）の総会で東京招致チームの一員であるニュースキャスター滝川クリステルが最終スピーチで日本の「おもてなし」という言葉で東京をアピールしたことは、一つの要因として考えられる。
しかし、新聞記事、またはGoogle Trendsでおもてなしという言葉の分布、そして意味内容についてさらに分析した上で、上記の使い方は一つの事例に過ぎないことが明らかになった。さらには、おもてなしは2000年から、主に日本の企業の海外での販売、または日本国内の観光業界に関する記事に使われるようになったことも分かった。

2020年に開催が予定される東京オリンピックにおいて、日本政府は国際舞台に向け、東京を安全で観光者に対して親切な都会として宣伝に力を入れている。しかし、東京はいくつかの国際的な問題に対峙しなければならない。それは主に現在に至って続いている東京電力福島第一原発事故による放射性物質拡散、そして著名な政治家の人種差別的発言である。そのため、首都のイメージを再建するために、日本政府は「おもてなし」という概念を国民にもさらに深めるために宣伝活動を行っている。それは「おもてなし」を日本独特の文化としてまで宣伝されている。

しかし、おもてなしはそもそもどのようなものであるか？以上の宣伝活動は誰のためになるのか？敗者も出るのか？日本のマスコミはどのような役割を果たしているのか？

# コモンズ・モデルをベースとした文化観光の展開可能性について

斉藤理（山口県立大学准教授）

キーワード: 文化観光、コモンズ、文化遺産、地域文化、コミュニティ

## 1）調査の背景・目的

近年、わが国においても各地域が創意工夫を凝らしながら観光事業を促進しようとする動きが盛んであり、これを機に地域の自文化を再認識する流れが生まれ、結果的に交流人口を増加させながら地域振興に繋がっている事例も多い。一方、こうした動きが観光の弊害を生み、地域文化をむしろ均質化させてしまう恐れも指摘できることから、文化遺産等の観光資源を地域コミュニティ自らが共同で維持していくという、内発的であって、かつ持続可能な仕組みの整備も肝要である。

## 2）調査の方法

そこで「コモンズ・モデル」を仮定しつつ有効な手法について検討している。

本来、牧草地の共同管理を行う制度に起源がある「コモンズ（commons）」だが、近年では転じて、「公」の領域でも、さりとて「私」の範疇でもない「共」としての、つまり地域住民レベルでの自主的な地域資源の保全を指す概念としても定着しつつある。その際、文化遺産を取り巻くコミュニティも、地域における貴重な資源を共有・維持・管理していかなければならないという点で今日的なコモンズの一形態として位置づけられ得ると仮定し、各地の事例検証を通し、上記モデルの実効性を高める作業を進めている。

## 3）調査結果の概要

a） コモンズ・モデルの事例調査：街全体が世界遺産のリューベック（ドイツ）におけるリビングヘリテージの事例、ファン層を中心に維持保存の担い手のネットワークを拡大しているオーストリアの保存鉄道等の事例調査を実施。その結果、「関心を共にする層」の連携、並びにそうした連携を促す「中心テーマ」の設定が重要であることが判った。

b） 具体的アプローチの試行：山口県内の一中山間地域（人口約 1,400 人/500 世帯）において、文化的なテーマを軸としつつ文化観光促進事業を試行（2012/13 年度大学生による地域活動の形で実施）。地域外からの来訪者の観光行動が、当該地域固有の文化資源を直接・間接にサポートする流れを創出できるよう工夫し、「関心を共にする」来訪者も、地域関係者と共に地域課題を共有する「コモンズ」を形成し得る、という意識醸成の可能性を明らかにした。

## 4）今後の展開可能性

同モデルを進めるに当たっては、潜在する文化的テーマを見出し、かつグローバルな枠組みにおいても関心層の拡がりを創出できる能力を備えた人材が求められるが、国際文化学の素養はまさしくこれに適していると考えられる。文化観光の文脈における「コモンズ」形成に相応しい人材育成の手法等についてはなお検証を必要としている。

# ９．共通論題

**共通論題１**

**７月５日（土）**

**１１：４５～１３：４５**

**Ｅ３１２**

**司会：若林一平**

**（文教大学名誉教授）**

## 共通論題「飯舘村再生への文化の貢献」趣旨説明

若林一平（文教大学名誉教授/ふくしま再生の会・会員）〈ippei@shonan.bunkyo.ac.jp〉

キーワード：生活文化、文化多様性、原子力災害、自然との共生、戦略としての安全

◆希望の共有

2014年4月13日・20日の両日、福島県相馬郡飯舘村小宮地区の大久保金一農園で桜の植樹会が行われた。計100人以上の参加を得て100本以上の桜の苗木が植えられた。植樹会に参加した大学生から「被災者の方々と私は絶望を共有することはできないけれど希望を共有することはできる。そういうことをいろいろな人に教えてもらったと思う」という感想が寄せられた。

2011年3月11日の東京電力福島第一原子力発電所のメルトダウンに伴う原子力災害の結果､6,000人の村民の全村避難が続いている。桜は村の再生の象徴である。これから3年後、５年後、そして30年後に実現する桜の花園への希望を共有するべく植樹会が行われたのである。

◆までいな生活文化と文化多様性

飯舘村は「日本で最も美しい村」連合の会員である。そこでは未来に残したい村の特徴の第一番に「までいな生活文化」をあげている。「までい」の語源は「まて（真手）い」とも言われ、徒に効率を求めるのではなく丁寧に手間ひまを惜しまない生活の形を意味している。飯舘村では一戸一戸がそしてひとりひとりが「までいな生活文化」を体現している。

「日本で最も美しい村」連合が「平成の大合併」の最中の2005年に発足したことに注目したい。この連合は「小さくても素晴らしい地域資源や美しい景観を持つ村の存続」への危機意識から誕生したのである。この動きは森という根源的な地域資源を守ろうとした南方熊楠の神社合祀反対運動とも重なってくる。

◆自然との共生とオオカミ信仰

2013年4月1日に飯舘村の人びとが心のささえとしてきた山津見神社で火災が発生し、社殿と宮司宅が焼失し宮司の連れの方が亡くなった。しかしここに奇跡とも言うべき事実が判明した。山津見神社のオオカミの天井絵240枚が和歌山大学の加藤久美研究室チームによって焼失の数ヶ月前にすべて撮影されていたのである。自然との共生を考えるとき生態系のピラミッドの頂点に位置するオオカミの存在が再評価されている昨今、山津見神社の再建にあたって残された天井絵のデータが有力な手がかりとなることが期待されている。

◆生きる戦略としての安全そして再生へ

2011年３月11日以後の飯舘村に降り注ぐ放射能についての情報は4月に入っても6,000人の村民には一切知らされなかった。ここから貴重な教訓を得て、正確なデータはまず村民自身が専門家の協力を得て自前で測定する「いいたて協働社」（菅野宗夫代表）が設立されたのである。村民の安全はできるだけ正確なデータの獲得を前提とした戦略判断なのである。2012年に始まった試験作付け、再生可能な分散エネルギーの運用実験など、飯舘村は原子力災害からの復興・再生という人類未体験の難事業への取り組みを世界に発信しようとしている。

参考文献：

「までい」特別編成チーム『までいの力』（SAGA DESIGN SEEDS、2011年）
佐藤栄佐久『福島原発の真実』（平凡社、2011年）
松居竜五・田村義也編『南方熊楠大事典』（勉誠出版、2012年）
小倉美恵子『オオカミの護符』（新潮社、2011年）
丸山直樹・須田知樹・小金澤正昭編著『オオカミを放つ 森・動物・人のよい関係を求めて』（白水社、2007年）
菅野宗夫「いいたて協働社設立趣旨」（いいたて協働社、2012年）

## ふくしまの再生は人間の再生から：飯舘村から世界に発信したい

菅野宗夫（飯舘村農業委員会会長・NPO ふくしま再生の会理事）〈kannnomuneo@gmail.com〉

キーワード：不信と不安、原発エネルギー、世界の英知、自分が変わる、人間の再生

### 不信を超えて

目に見えない放射能、放射線に対する不安ははかりしれません。いつ帰れるかも分からず、人生設計もたてられず、心身ともに限界に達しています。このような中で放射能・放射線について講習会を開き、ふるさと飯舘村の生活空間のきめ細かな線量測定を村民と専門家とが協働して行っています。信頼できる専門家の指導を受けて科学的なデータを蓄積して、無用な不安を取り除くとともに、再生のために必要な基本的データを収集しています。被災した翌年の2012 年 12 月に一般社団法人・いいたて協働社を設立しました。

### 被害者は飯舘村だけでしょうか？

原発事故は福島県だけが被害者ではなく、程度の差はあっても全世界に影響を及ぼしました。どの産業・家庭でも使っている原発エネルギー、これによって起きた事故は、科学研究の成果を未完成な技術で活用した結果といえます。大事なのは、起きてしまった事故の検証と対応であり、また、汚染された大自然の動植物がどのような影響を受けるか、それが人間社会にどのように影響するかということを長期間に渡って継続的に調査分析研究することです。

### 世界に向けて発信

いずれは帰還する地域の人たちが、研究者などの世界の英知と一緒になってこの困難に取り組むことが、地域の再生にもつながります。信頼される科学的なデータを世界に向けて発信し、そこから光明を見出していきたいと思っています。「いいたて協働社」は再生にむけて、放射線等の測定に始まり、様々な植物の実験作付けのための農業技術の提供、再生可能エネルギーの設備の運用など活動を多様化したいと思っています。

### 自らも変わらなければ

311 の被災の日までは、大自然に恵まれた阿武隈高原の地でお米、高原野菜、大豆製品、凍み豆腐などを生産し、安全安心と「飯舘の風土」を凝縮した製品を都会に贈り続けてきたと自負しています。基本は自然と人間との共生です。現在は原発事故により汚染され、飯舘村からの避難生活を余儀なくされました。事故直後から復興再生に向けてできることは何でもやるというチャレンジ精神と、自らも変わらなければの精神で活動しています。「ふくしま再生の会」のメンバーとしても日夜奮戦中です。

### 人間の再生から

原発事故は人間の知恵が引き起こしました。事故によって失われたものは何でしょうか。人間の知恵が無残にメルトダウンしたのではないでしょうか。しかし、私たちの希望は人間の知恵の再生に求める他ありません。原発事故からの村の再生は人間の知恵によって可能にしなければなりません。村の再生は人間の再生につながります。自ら変わることは人間の再生であり、人間の再生から福島の再生が始まります。

# 山津見神社天井絵復元プロジェクト

**和歌山大学観光学部　教授 加藤久美〈kumikato@center.wakayama-u.ac.jp〉**
**特任助教 サイモン・ワーン(写真撮影)**

**キーワード：オオカミ信仰、人間・自然・社会、地域プロジェクト、天井絵、復元**

背景：オオカミは1905年に東吉野で捕獲されたものを最後に絶滅したとされる。かつては山の神の使い「ご眷属様」「大口真神」とされ、農耕の神であり、様々な災害からの守神であった。地震、津波、火災、疫病が頻発し、黒船来航が世情を揺るがした江戸末期（安政）には、救済の力があるとされるオオカミの護符が多数発行された記録がある。

福島県相馬郡飯舘村佐須に鎮座する山津見神社は山の神「大山祇神社」を総本山とし、そのご眷属様（狼）を、虎捕山山頂の本殿、麓の拝殿に祀る。虎捕山は山頂が海からも見えることから、海の神でもあり、人々の暮らしを守る里の神でもある。拝殿の天井には狼絵が237枚描かれ、その信仰の厚さを物語っていた。絵が描かれたのは1905年（拝殿完成年）であるが、それは最後のニホンオオカミが捕獲された年である。

山津見神社は避難区域となりながら、地域の神社であり続けた。私たちが初めて訪れた2012年の暮、「保存状態がよくない」という宮司夫人の懸念を聞き、せめてデジタル保存をと、絵を一枚ずつ写真に収めた。3月末完成した写真集をお届けしようとした矢先､神社は全焼､夫人が命を落とされるという不幸な結果となった。

種の絶滅、特に野生動物の絶滅は、人間と土地とのつながりの一側面が失われることであると考える。信仰の対象でありながら絶滅に追い込まれた狼、その狼が狛犬として今、避難地域にたたずんでいる。自然信仰はその形も対象も多様だが、それぞれ地域の生業と深い関わりがある。その信仰の背景を理解することは、避難という、人々がその土地から引き離される惨事を作ってしまった社会を問うことではないだろうか。

天井絵の理解や復元の過程が地域と土地とのつながりを再確認し、回復する一助となれればと思う。それは地域への願いであり、地域を思われた故人へのせめてものご供養と考える。

絵復元アプローチ：絵の歴史背景や制作の詳細を理解する過程を地域プロジェクトとする: 天井絵は久米中時宮司(1844-1919)が私財を投じ1905年に完成させたが、元相馬中村藩御用絵師によること以外詳細不明である。現在の課題は以下３点。

1. 絵師はだれだったのか：元相馬中村藩御用絵師伏見東洲(1841-1921)は中時宮司とほぼ同じ時代を生き、相馬周辺に襖絵などを多く残している。現存する襖絵（伊賀氏蔵)の虎の表情はオオカミ絵と似ている。相馬出身の彫刻家佐藤玄々(1888-1963)は日本橋三越50周年記念の「天女像まごころ」(1960)の作者だ。1905年に上京する前の数年間東洲から絵を習っている。玄々は1945年東京空襲で家を失い、山津見神社に疎開し「神狗(白狼)」（相馬民族資料館蔵）を完成させている。1905年は天井絵完成年であり、もし東洲が制作に関わっていたならば、玄々の関りも考えられるのではないだろうか
2. 祈願者の名前：天井絵の祈願者：天井絵には、祈願者と思われる名前が記されているものが8枚ある。９名の名前と地名があるが、すべて名取郡、刈田郡で、うち5名は名取郡高舘村熊堂とある。現在、熊ノ堂には名取熊野三山があり､紀伊半島熊野の山伏の勧進だとされる。また､花が描かれている絵も８枚ある。それらは竜胆，萩、ワタとも見える。現在の高舘のシンボル「笹竜胆」は熊野新宮神社から伝わったとされる。萩は祈願者の土地にある宮城野萩か、神社の秋の大祭を祝うものかもしれない
3. 槻木遥拝所と国井久仙：明治41年頃柴田郡槻木町に山津見神社遥拝所が国井久仙により建てられた。久仙は山岳参詣者の先達であったこと以外詳細不明である。遥拝所は1989年に解体され、中のものは柴田の郷土館に寄贈された。その中にオオカミ絵馬一枚、中時宮司からのはがき、中時宮司の追悼文などがあった。絵馬は天井絵と同じものであり、復元の見本として貴重だ。火災で失われた山津見神社の護符も多数残っている。山津見神社は全国に信者がいるが、上の祈願者とともに、当時の（現）宮城南部に多かったことがわかる。

取材協力：山津見神社久米宮司、禰宜、佐須地区の皆様（代表菅野永徳氏）　ふくしま再生の会相馬、南相馬、福島､柴田、　宮城各資料･郷土館　　三井物産環境基金助成研究プロジェクト(復興支援)（2013.10~2016.9）

# 飯舘村は何を失ったのか？

川村湊（法政大学国際文化学部教授）〈minato@kawamura.jp〉

キーワード・村史、民俗、山の神、凶作、復興

福島県飯舘村は、放射能被災の村として知られている。二〇一一年三月十一日、高原の山村に突然、放射能雲が流れ込み、山林や田畑、牧場や農家や村役場など、まどろむような田園の村を、三十キロ以上も離れた福島第一原子力発電所から発散された放射性物質の放射線が汚染したのである。村には、原発立地の近隣の市町村から、避難民が続々と押し寄せてきた。浪江町、南相馬市小高地区、着のみ着のままのそれらの人々に、飯舘村の人々は、温かい汁やおにぎりを提供した。放射線が降り注ぐ外気を吸い、汚染された雨に打たれて。もちろん、避難民を助けるより、まず自分たちが避難すべきであったことを、まったく考えにも及ばずに。

避難が指示された。田畑の耕作の準備もしないままに、牛舎に牛を残したままに、豚も鶏も犬も猫も、憎らしいが憎めきれない鼠たちを残して、自分たちのためのおにぎりも持たずに、村人たちは全員、家、村から離れなければならなかったのである。天明の時代に、凶作の飢饉によって、田畑や家屋敷から逃散しなければならなかった時のように。

村には、逃散、離村の歴史の記憶があった。新開の山田もあれば、牧畜業の開拓もあった。歴史と伝統と思い出があった。それは、日本の山の村のどこにでも共通するような歴史であると同時に、飯舘村の独自の、かけがえのない伝承であり、風俗でもあり、風土を作り出してきた時間の堆積でもあったのである。

原発立地でもないのに、原発事故の災厄だけを引き受けなければならなかった不運な村。しかし、それを自分たちの頭の上に降りかかってきた不運や不幸なことだけとして甘んじるわけ(耐えるだけ)にはゆかない。それをまた、村の歴史の一部として、解決し、乗り越え、伝えてゆかなければいけないのである。

三・一一以前には、村はどうであったのか。なくなったもの、失われたものは何であったのか。それはどのように回復されるべきか、あるいは諦めるべきなのか。復興するためには、何が復興されなければならないのかという問が必要だ。そして決定的に失われたものを数え直し、新たにもたらされなければならなものを要求することが(誰に？　もちろん、憎むべき事故を起こした者たちに)。

村の大部分を占める山林は、緑濃く繁っている。平年と変わらぬ緑の山の風景だ。だが、決定的に変わったことがある。生きものの気配がほとんどないことだ。もちろん、猪や兎や山鳥たちはいるはずだ。しかし、彼らはひっそりと気配を殺して、姿を見せない。彼らを追う人々の影がなくなったのだから、もっと村里や田畑や牧場にも下りてきてもいいのに。山の神は、どこに行ったのか。どこに、姿を隠しているのか。

山は死んでしまったのだろうか、村も同様に？　飯舘村の歴史を復元し、村の姿を昔のままに思い起こすこと。それが復興や再生につながることを信じて。

# 国民を棄民する国家とは、どんな国家なのか？

**椎野信雄（文教大学国際学部教授）<shiino@shonan.bunkyo.ac.jp>**

キーワード：「国民国家」「国民」「棄民」「グローカリズム」「交流文化」

「棄民」という奇妙な日本語がある。「棄民」とは何か？身近にある辞書を引くと、「戦争や災害などで困窮している人々を、国家が見捨てること。また、その人々」（goo辞書国語辞書）（デジタル大辞泉）、「国家の保護から切り離された人々」（大辞林 第三版）、「見すてられて国家などの保護下にない人たち」（広辞苑）、「戦争や災害、政治的情勢などにより、困窮する国民を国（の政府）が見捨てること。また、それにより国の保護から切り離された人々のこと」（通信用語の基礎知識）、「政府によって切り捨てられた（元）自国民を指す語」（ウィキペディア）、関連して「棄民政策」とは「海外などに残されたり、移民した自国民を守らず見捨てる政策の事」（はてなキーワード）と書かれている。最初に辞書に登場したのは、広辞林（新装第二版、1999）や広辞苑（第六版、2008）のようである。この日本語は比較的新しい概念であることが分かる。

そして「棄民」の例として語られているのは、「日本では、満州の開拓にかり出され敗戦後に当地に取り残された人々や、国内の食料難から政府に奨励されてハワイ、カリフォルニア州、中南米諸国に移住していった人々などが「棄民」と呼ばれることがある」（ウィキペディア）であり、中国残留日本人・日系ドミニカ人・日系台湾人・からゆきさん・サハリン棄民・サハリン朝鮮人棄民・ブラジル棄民・「ヒバクシャ」棄民・「沖縄」棄民・「在日コリアン」棄民・「水俣病」棄民などなどである。そしてそこに「福島原発」棄民が繰り替えされてしまった。

日本の国民国家の政府が「棄民政策」を内蔵していることは歴史経過が証明しているだろう。問わなければならないのは、日本の「国民国家」とはどのようなメカニズムの国家なのだろうかということである。さらに「国家」が「国民」を棄てることを問題にするだけでなく、「国民」が「国家」を棄てることは可能なのだろうかという問題をどう考えることができるのかという問題を提起することでもあるのだ。「国民国家」の成立の根幹に関わる問題である。

この問題に対して、グローカリストの視点から考察してみたいと思う。どのような意味であれ世界のグローバリゼーションやグローバリズムに、日本も巻き込まれていることは事実であろう。これに対抗する形で、ローカリゼーションやローカリズムも一部では注目されている。こうしたコンテクストの中で、グローカリズムとは、「棄民」をする国民国家を越えたポスト・ナショナリズムを構築するために、グローバリズムとローカリズムを対立概念とせずに、ローカルな地域の生活を再生する視点のことである。グローカリゼーション（glocalization）および「文化」の概念分析を試みながら、グローカリズムの「交流文化」の可能性を検討してみたいと思う。

共通論題２

７月５日（土）

１１：４５～１３：４５

Ｅ４１２

司会：山内晴子

（早稲田大学２０世紀ﾒﾃﾞｨｱ研究所・朝河貫一研究会理事）

# 戦前・戦中期の中国をめぐるトランスナショナル・ネットワーク
## ― ジェームズ・バートラム、松本重治、渋沢敬三 ―
## 全体概要

戦間期・戦中期を通じて中国はアジア太平洋地域での国際関係の焦点となり、多くの人々の関心を集めた。満洲事変、華北分離工作、日中戦争、太平洋戦争と日本の軍事行動が断続的に続く中で、さまざまな背景を持つ人々が中国を舞台に活動し、トランスナショナルなネットワークが形成されていった。

近年、中国を場とした人々の国境を越えた活動と人脈が、国際社会に様々な影響を与えてきたことが改めて評価されている。たとえば、国際連盟研究が大きな進展を見せる中で、保健衛生分野における連盟の活動に関連して中国で活躍した人々の足跡などがすでに明らかにされている。

本パネルは、戦前・戦中期の中国をめぐるトランスナショナル・ネットワークに注目し、1940 年前後の時期を中心に、異なる地域から中国を訪れ、中国において国境を越えた人的ネットワークを形成したバートラム（1910-1993）・松本重治（1899-1989）・渋沢敬三（1896-1963）の 3 名を取り上げる。

ニュージーランド出身のバートラムは、西安事件後に最初に西安入りした外国人であり、事件直後に関係者に対して行ったインタビューをもとに西安事件に関する書籍を著した人物である。中国共産党関係者とのネットワークを形成しつつ、1941 年に香港で日本軍の捕虜となるまで中国支援のために活動している。

同じく西安事件のスクープで知られる同盟通信記者の松本重治は、上海に長く駐在し、日本外務省と軍部の狭間で、イギリスのビジネス界を媒介とした独自のトランスナショナルなネットワークを形成したことが注目される。また、祖父渋沢栄一の後継者でもある渋沢敬三は、1943 年日銀副総裁として訪中し中国をめぐる人脈を発展させていく。

以上 3 名は、いずれも戦前・戦後を通じて国際交流と深い関わりを持った人物である。彼らの戦前・戦中期における中国での経験と人脈とが、戦後期にトランスナショナル・ネットワークとしてどのように連続し、新たに発展していくのか、彼らの活動の評価と位置づけについて、それぞれの研究成果を報告する。

司会：山内　晴子　　（早稲田大学 20 世紀メディア研究所・朝河貫一研究会理事）
報告１：山岡　道男　（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）
　「西安事件を取材したニュージーランド人：ジェームズ・バートラム」
報告２：高光　佳絵　（千葉大学大学院人文社会科学研究科助教）
　「戦前期の松本重治と上海におけるイギリス帝国ネットワーク」
報告３：飯森　明子　（常磐大学国際学部非常勤講師）
　「渋沢敬三の中国をめぐるネットワーク　―　1943 年訪中から戦後へ」

## 報告(1)
## 『西安事件を取材したニュージーランド人：ジェームズ・バートラム』
山岡道男（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）

本報告で取り上げるニュージーランド（以下、NZ）人のジェームズ・ムンロ・バートラム（James Munro Bertram　: 1910-1993）は、私の研究している太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations：以下、IPR）の NZ 支部（NZ Council, IPR、以下 NZ IPR）のメンバーではなかったが、IPR 関係者とは交流を持っていた。それは、彼の戦前期の活動範囲が中国と関連していたことから、IPR の調査・研究領域と密接に関わっていたからである。また、NZ 国内において、戦前期に中国で布教活動をしていた宣教師以外に、IPR 関係者を除くと、一般の人々の間では、アジア地域に対する関心はほとんどなく、そのために、少数の中国関係者の間では、密接な情報の交換や交流が行われていた。

彼は、NZ で有名な学校であるワイタキ男子高等学校（Waitaki Boy's High School）に学んだが、その校長(Rector)であったフランク・ミルナー（Frank Milner : 1875-1944）は、NZ IPR の発足時（1926 年 8 月）からのオリジナル・メンバーである。その息子であったイアン・ミルナー（Ian Milner : 1911-1991）も NZ IPR と関係しているが、イアンとバートラムとは、同高校での同級生であり、生涯にわたり親友でもあった。また、米国人で、ゾルゲ事件の関係者であり、マッカーシズムの犠牲者としても知られているアグネス・スメドレー（Agnes Smedley : 1892-1950）とは、彼らが若い時分に、中国の西安で出会っている。

また、現在の NZ でも、戦前期の中国と密接な関係を持っていた人物として、レビ・アレイ（Rewi Alley：1897-1987）とロビン・ハイド（Robin Hyde：1906-1939）の 2 名の名前が挙げられるが、バートラムは、この両名とも深い交流を持っていた。

本報告では、戦前・戦中期において数奇な体験をした、NZ 国籍のジェームズ・バートラムを取り上げ、戦前・戦中期の彼の活動について、これまで収集した資料を基に検討する。それと同時に、NZ における資料の収集過程に関しても報告する。

## 報告(2)
## 『戦前期の松本重治と上海におけるイギリス帝国ネットワーク』

高光佳絵　（千葉大学大学院人文社会科学研究科助教）

本報告は、西安事変のスクープで有名なジャーナリスト松本重治の第二次世界大戦勃発以前における国際政治への民間人としての関与を論じるものである。

松本は、第二次世界大戦後、ロックフェラー3 世との協力の下、六本木の国際文化会館の運営に手腕を発揮し、日本の国際化および国際協調に貢献したとして高く評価されている人物である。一方、松本の戦前期の活動については、日中和平工作（汪兆銘工作）等で部分的に知られている以外は、先行研究ではあまり注目されることがなかった。

しかし、松本は、1929 年のＩＰＲ京都会議に事務局として参加したことを契機に、1930 年代を通じて、満洲問題をめぐる対英米関係改善という観点から国際政治において民間人として重要な役割を果たすことになったと考えられる。

本報告では、まず、蝋山政道、松方三郎、横田喜三郎らと設立した東京政治研究所における「満洲問題解決案」の作成、ＩＰＲによる満洲国「承認」構想への関与などの松本の活動が、通信社「連合」および「同盟」支局長として赴任した上海においてチャンセラー（Chirstopher Chancellor）やケジック兄弟（William Johnstone and John Henry Keswick）を通じたイギリス帝国人脈の形成による民間外交へと発展する過程を追うことにより、松本重治の 1930 年代における国際政治への関与を明らかにする。さらに、ロンドン世界経済会議ワシントン予備会談、ハル・広田メッセージ交換などの同時期に公式外交によって追求された対英米関係改善の模索との関係、イギリス大蔵省による対日宥和路線との関係を分析し、松本による民間外交の位置づけを試みたい。

## 報告(3)
## 『渋沢敬三の中国をめぐるネットワーク　―　1943 年訪中から戦後へ』

飯森　明子　（常磐大学国際学部非常勤講師）

渋沢敬三(1896－1963)は、日本漁業史・漁民生活の民俗学研究者として、あるいは経済史においては戦中の日銀総裁、終戦直後の幣原喜重郎内閣蔵相として、さらにパージ解除後は、財界の重鎮としてこれまで評価されてきた。一方、IPR(太平洋問題調査会)と日本に関していえば、戦前の IPR で多くの国際主義者が活躍したことで知られるが、戦後は冷戦やマッカーシズムの影響を受けてやがて IPR が解散したことからあまり注目されてこなかった。

だが、冷戦下のアジアに対する姿勢が問われた 1954 年、第 12 回 IPR 京都会議では渋沢が日本 IPR 理事長をつとめた。日本からの参加者は戦前以来の知識人の他、親米寄りのグループや中国大陸への貿易に積極的なグループなど様々な人々が集まっており、渋沢はこれらの仲介役であったと考えられる。さらに 1956 年台湾を訪問した。このような役割や位置づけを果たすには、とりわけどのような中国に対する姿勢や人脈が連関していたのだろうか。

本報告では、近年整理公開された渋沢史料館所蔵の渋沢敬三関係資料などを用いて、渋沢の中国をめぐる人脈に注目した。すなわち 1943 年汪兆銘政権下の訪中などで接点ある人々、終戦直後の邦人引揚げに関与した湯恩伯との戦後の交友、1954 年 IPR 京都会議に関わる人々に注目する。渋沢の中国をめぐる長期的現実主義的な姿勢と人脈が、1950 年代の日本の国際社会への復帰や日中関係の再建に連なっていることを紹介する。

共通論題３

７月６日（日）

１０:１０～１２：１０

Ｅ３１２

司会：鈴村裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）

## 1. 課題名

造られる文化、変わる文化――映画、音楽番組、大衆演劇を事例として

## 2. 企画の趣旨

われわれは過去 2 回にわたり、日本を代表する文化的事象の特徴を検討してきた。すなわち、2011 年の第 11 回全国大会では「現在に生きる能楽―内と外の視点による事例と検討―」と題し、日本を代表する芸能のひとつである能楽を対象とし、現代の文化や芸術、あるいは人々の日常生活の中でどのような役割を果たしているかを検討した。また、第 12 回全国大会においては日本の文化に特徴的な存在である妖怪を取り上げ、「日本の文化における超自然的な事物の表象―物の怪、幽霊、怪異を中心に」と題して絵画や演劇、映画の分野でどのような影響を与えてきたかを考察した。今回は、これまでの成果を踏まえ、伝統的とされる文化的事象の現代への応用や、近代以降に生み出され、今では伝統となった文化的事象のあり方を取り上げ、検証することを目的とする。

具体的には、マートライ・ティタニラ（早稲田大学）が「日本映画における伝統文化の引用と変容」と題し、日本的な要素を巧みに作品の中に織り込んだとされる黒澤明が監督した作品を例として、黒澤における日本の伝統文化の用いられ方から、映画における伝統文化が果たす役割を考える。シェリー・ブラント（ロイヤル・メルボルン工科大学）は、「こうして文化は作られる――NHK 紅白歌合戦を事例として」と題し、日本を代表する歌謡番組として広く知られる NHK 紅白歌合戦を取り上げ、1951 年にラジオ番組として制作された紅白歌合戦が大晦日を象徴する番組になる過程を通して、新しく生まれた事象がひとつの文化になるまでの様子を明らかにする。また、鈴村裕輔（法政大学）は「宝塚歌劇とレヴュー――外来文化の普及と定着」観衆に良質の演劇を安価で提供することを目的として 1914 年に創設された宝塚少女歌劇団が、当時のフランスにおいて最も洗練された舞台の方式であったレヴューを日本に導入し普及させる一方、本場であるはずのフランスにおいてレヴューが衰退しているという現実を踏まえ、外国の文化の導入と定着の特徴を検討する。

以上のように映画、音楽番組、大衆演劇を事例として、われわれは文化の導入、引用、創造、定着がどのようになされたかを明らかにする。

## 3. 報告者および報告の概要

① 企画の趣旨と発表の概要（鈴村裕輔：法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）
② 日本映画における〈妖怪〉：日本映画における伝統文化の引用と変容（ティタニラ・マートライ：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館研究員）
③ こうして文化は作られる――NHK 紅白歌合戦を事例として（シェリー・ブラント：ロイヤル・メルボルン工科大学上級講師）
④ 宝塚歌劇とレヴュー――外来文化の普及と定着（鈴村裕輔）

＊司会：鈴村裕輔

# 映画における日本の伝統芸能の引用と創造——黒澤明『乱』をめぐって

マートライ･ティタニラ
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館研究員
t.matrai@fuji.waseda.jp

様々な芸能のジャンルの間の関わりは古くから見られ、お互いに影響を与えつつ成立している。古い物語が小説、オペラ、映画などで生まれ変わる事例は少なくないし、話そのもの以外の要素の特徴や技術が別の分野に取り込まれることも少なくない。映画の場合、演芸、写真、後に音声の様々な要素からなるものとして成立した結果、当然ながらこれらの芸能的や技術的な要素に依存している。

黒澤明も様々な芸術・美術について若いころから興味を持った映画監督の一人である。画家を志していた黒澤は戦争中に能と出会っていらい能に強い興味と関心を抱き、複数の映画に能を取り入れたのだ。例えば、初期の作品である『虎の尾を踏む男達』（1945 年）では能や歌舞伎の話の筋立てを使いながら、能や歌舞伎の演出を参照している。また、『蜘蛛巣城』（1957 年）では、能を参照する方法がそれまでより複雑になり、シェイクスピアの物語を利用しながら、日本の伝統芸能を完璧に適用しているし、『赤ひげ』（1965 年）や『夢』（1990 年）などの性格の異なる映画でもそれぞれの方法で能を参照するのである。

本発表では、黒澤明が 1985 年に製作した『乱』を中心とし、黒澤の美的な映画作りについて論じる。シェイクスピアの戯曲『リア王』を日本の戦国時代に移すとともに、日本の古典文学である『平家物語』や伝統芸能である能を強く参照することによって、演劇における視覚的要素が映画においてどのように表現されたのか、さらに、シェイクスピアのせりふと能の詞章という文学的な要素がどのように映像化されたかについて考察する。『乱』には能からとった直接的な詞章や美的な引用は少ないものの、黒澤はより深く能の抽象化された表現を応用している。発表では、『乱』の構成、能を参照される詞章、さらに台詞ではなく、映画の美的な側面で表現される謡曲からの引用について考察する。そして、黒澤の『乱』の製作の際にノートに記録された記述を手がかりに、黒澤が表そうとした世界を紹介したい。

## 「ふるさと」としての国――紅白歌合戦に見る「文化の創造」と「文化的ナショナリズム」

シェリー・ブラント
ロイヤル・メルボルン工科大学メディア･コミュニケーション学部上級講師
shelley.brunt@rmit.edu.au

本発表では、毎年 12 月 31 日に NHK で放送される「NHK 紅白歌合戦」の中で描かれる日本に固有な文化的な語りのあり方とその中で作り上げられる「新たな伝統」を検討する。具体的に取り上げられるのは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の前後における紅白歌合戦の内容の変化である。

「NHK 紅白歌合戦」という大晦日の恒例行事となったテレビ番組は、太平洋戦争後の占領時代に国やふるさとへの帰属意識をよみがえらせるために考案されたラジオ番組に由来しており、その意味で放送が開始されたときから災厄と関わりを持っているといえる。今日、公共放送である NHK は、歌を通して国を形作り、国のあり方を反映し、そして国を思う手段として紅白歌合戦を利用している。このような背景を踏まえて考えると、紅白歌合戦は先例のない激動の時代にあって、「帰属意識の語り」を検討するための重要な視座をわれわれに与えることが分かる。

この視座に従い、本発表では主に文化的ナショナリズム、民族音楽学、日本研究の理論に基づいて検討が進められる。その際、中心的に扱われるのは、2011 年から 2013 年の紅白歌合戦である。この 3 回の紅白歌合戦は、それぞれ「あしたを歌おう。」（2011 年）、「ニッポンラララ♪歌で会いたい。」（2012 年）、「歌がここにある」（2013 年）というテーマが設定されている。報告者は、こうしたテーマが震災後の対応と復興の過程を観客に容易に理解させるために有益な仕掛けとなっていること、さらに文化の活性化にも寄与していることを議論したい。そして、こうした検討によって、「ふるさと」に関する作品を唄う歌手が、観客に対して甚大な被害を受けた地域の人々への共感を呼び起こす役目を担い、人々に「われわれはひとつの共同体に属しているのだ」というより緩やかな意識を抱かせる可能性があることを考察したい。

# 外来文化の普及と定着——東京宝塚劇場の開設を事例として

鈴村裕輔
法政大学国際日本学研究所客員学術研究員
yusuke.suzumura.65@hosei.ac.jp

東京宝塚劇場が開場したのは、1934（昭和 9）年 1 月 1 日のことであった。東京における宝塚少女歌劇団の上演は 1918（大正 7）年から行われていた。しかし、当時、宝塚少女歌劇は自前の公演会場を東京に所有しておらず、帝国劇場、市村座、邦楽座、歌舞伎座、新橋演舞場など、既存の施設を借りて公演が行われていた。そのため、東京宝塚劇場の開場は、宝塚少女歌劇団が初めて東京における拠点を確保したという意味で、宝塚歌劇の画期をなす出来事であった。一方、実業家として様々な新機軸を打ち出した小林一三が率い、すでに東京でも活動を行い、しかもレヴューというフランスから導入された最新の表現形式によって関西圏で人気を博し、東京でも一定の知名度を有しつつあった宝塚少女歌劇団が専用の劇場を設けたことは、東京の演劇界や興行界にとって脅威となる出来事であった。何故なら、新しい劇場の開設は、東京の舞台関係者に「宝塚少女歌劇団が東京での活動を本格化させるための第一歩」、「小林一三が東京の演劇界に殴り込みをしかけた」と受け止められたからである。実際、当時の東京の演劇界を代表する松竹の大谷竹次郎と小林一三を対比させ、東京宝塚劇場の開場を「小林と大谷の対決」という枠組みで捉える見方は、決して珍しいものではなかった。

今回の報告では、東京宝塚劇場の開場が一面において宝塚少女歌劇の東京進出であるとともに、他面において関西圏で定着した宝塚式のレヴューを東京で本格的に普及させようとする試みの象徴と捉え、「宝塚の東京進出」がいかに報道されたかを、東京の主要な新聞の記事に即しながら具体的に検討する。そして、当時の人々にとって最も重要で日常的な情報の獲得手段でありながら、読者の興味や関心を引き付けるためにしばしば煽情的な記事を掲載した新聞を通してみることで、「宝塚歌劇場の東京進出」が演劇界にどのような影響を与えたのか、新聞の読者にどのように受け止められたのか、そして外来の文化的事象であったレヴューが市場の開拓の際にいかなる影響を発揮したかを考察する。

共通論題４

７月６日（日）

１０:１０～１２：１０

Ｅ４１２

司会：堀内直哉

（目白大学教授）

## 全体概要

## テーマ　「近代日本の対外認識――中国・モンゴルへのまなざし」

### 司会者・報告者

司会者

堀内直哉（目白大学教授）

報告者及びテーマ

伊藤信哉（松山大学法学部准教授）

「有賀長雄の対外認識――日露戦争から第１次世界大戦まで」

萩原稔（大東文化大学法学部准教授）

「右翼思想家の中国認識――満州事変から日中戦争直前まで」

鈴木仁麗（明治大学非常勤講師）

「モンゴル認識の形成――財団法人善隣協会の活動を支えたモンゴル認識を中心に―」

### 全体の概要

近年、知識人やメディアの言説に注目し、その国際秩序に対する認識を分析するという研究は数多くみられるところである。今回の共通論題報告においてもその手法を踏襲しつつ、「同時代の国際秩序、及びその変化に対する認識」と、日本以外の「個別の国家・地域に対する認識」（今回は中国・モンゴルが中心となる）との結びつきを意識した報告を行う。

伊藤報告では、国際法学者・外交史学者の有賀長雄（1860－1921）が、19 世紀の末から第１次世界大戦初期（1914 年）の国際秩序をどう認識していたかを分析し、あわせて西洋諸国の動向と、中国に関する彼の言説を検討する。

萩原報告では、満州事変（1931 年）、国際連盟脱退（1933 年）という事態をふまえ、北一輝（1883－1937）や大川周明（1886－1957）、満川亀太郎（1888－1936）をはじめとする右翼思想家が、現実の日本を取り巻く国際秩序をいかに見ていたか、そして対立を深める中国との関係について、その社会や文化に対する見方もふまえながら、どのような認識を有していたのかを分析する。

そして鈴木報告では、1933 年に設立された財団法人善隣協会の、モンゴル事情の紹介・宣伝といった時事評論・啓発運動と、政治・文化・歴史など幅広い分野における学術研究を融合させた活動が、いかなるモンゴル認識によって支えられていたのか、その認識が形成される過程を 1900 年前後までさかのぼって検討する。

## 「有賀長雄の対外認識――日露戦争から第１次世界大戦まで」

伊藤信哉（松山大学法学部准教授）

### 報告概要

有賀長雄（1860―1921）は、明治から大正初期にかけて活躍した国際法学者・外交史学者である。国際法学者としては、とくに戦時国際法の領域で活躍し、日清・日露戦争の際には、伊藤博文や大山巌の依頼によって、現地派遣軍の国際法顧問として従軍している。また外交史の領域では、日本で初めて、本格的な外交史の講義を東京専門学校（現・早稲田大学）で担当したほか、日本で最初の外交専門誌である『外交時報』も創刊している。

有賀は辛亥革命のあと、袁世凱の法制顧問として北京に渡り、中華民国憲法草案の起草に関った。そのため、彼に関する先行研究の多くは、おもにこの点に分析の焦点を絞り、その中国観などを解明しようとしてきた。

しかし『外交時報』などに発表された有賀長雄の言説を全体として見てみると、彼は「中国や朝鮮半島の情勢を、独立した事象として認識していた」というよりも、欧米列強が当時、ヨーロッパやアフリカ、中近東などで多面的に展開していた帝国主義外交の一環として、これを認識しようとしていたことがよく判る。たとえば1900年の時点で、彼はつぎのように述べているのである。

「世界の大勢は英露独仏の向背に依て定まる、墺伊以下の諸国は蠢々徒に他の後塵を拝するのみ〔…〕吾人は遺憾なから世人の已惚るゝ如く帝国は日清戦争の餘威に藉り一躍して一等国の伍班に列したりと言ふ能はず、而かも極東事件の処理には亦必す何国と雖も帝国を度外視する能はさるは識者と共に認むる所、而して極東の外交なるものは北京若くは東京の外交に非すして実は悉く倫敦、伯林、聖彼得堡若くは巴黎に於ける外交の反響に外ならさるを以て、心を外交の機微に潜むる者は三たび思を此こに致して可なり」（「欧洲半月外交史」『外交時報』第26号、1900年3月）

そこで今回の報告では、彼の対外認識を総体的に俯瞰するなかで、その中国に対する認識を位置づけてみたい。有賀は当時、韓国の保護国化や満洲の「委任統治」を主張しているが、これらの「植民地支配」を、彼がどのような論理で正当化しようとしたのかといったことが、本報告の関心の中心である。

## 「右翼思想家の中国認識――満州事変から日中戦争直前まで」

萩原稔（大東文化大学法学部准教授）

### 報告概要

戦後日本を代表する政治学者の丸山眞男は、1930 年代の日本を取り巻いていた「雰囲気」について、次のように回想している。

「私が旧制一高に入学した一九三一（昭和六）年の九月にいわゆる満州事変が勃発した。十五年戦争の開始である。文献だけに頼る現代史の研究者からは『満州事変（または柳条湖事件）は果してそれほど大きな時代の転機だったか、どうもその後の盧溝橋事件（いわゆる日華事変）に比べてそんなに劃期的な変化がおこったようには思われないが…』という質問を受けることがよくある。むろん歴史はすべてステップ・バイ・ステップの変化であり、日本の軍国化もまた然りである。けれども私の実際の見聞にしたがえば、満州事変はやはり一つの大きな転機であった」（丸山真男「昭和天皇をめぐるきれぎれの回想」1989 年、『丸山真男集』第 15 巻、岩波書店、1996 年、p20）

丸山の回想にあるように、「満洲事変」が実際に「大きな転機」だったかどうかについては、同時代を生きた人々のあいだにも異論はある。しかし、いわゆる「右翼運動」の趨勢をみれば、右翼団体の増加や大学等における右翼運動の高揚など、「大きな転機」と言いうる兆候は間違いなく存在するといえよう。

本報告では、このような状況の中で、右翼思想家が同時代の国際秩序、及びその変化に対する認識をどのように示したのか、そしてそれを日本以外の個別の国家・地域に対する認識とどのように結び付けていったのかを考察する。具体的には、北一輝（1883－1937）、大川周明（1886－1957）、満川亀太郎（1888－1936）という、戦前日本の右翼思想家の代表的な存在である３人のうち、特に北と満川に焦点を合わせ、満州事変以後から日中戦争勃発直前まで（1931 年～1937 年）の言説を追い、「満洲国」建国（1932 年）や国際連盟脱退（1933 年）など、現実の日本を取り巻く国際秩序の変化をいかに対応すべきと考えたのか、また対立を深める中国との関係についていかなる認識を有していたのかを分析する。

## 「モンゴル認識の形成――財団法人善隣協会の活動を支えたモンゴル認識を中心に

鈴木仁麗（明治大学非常勤講師）

**報告概要**

近代日本のアジア認識については、多くの研究蓄積があるが、その大半が対中国認識の検討にあてられている。そして、２０世紀初頭のアジア認識は、アジア進出の契機となった日清戦争、日露戦争などのいくつかの重大な事象とシンクロするように幾度となく転換を迎えた。その過程で大きな矛盾を抱え込むことになるアジア認識・中国観を、知的世界ではいかに乗り越えようとしたのかが、議論の中心テーマの一つであり続けている。また、対中国認識は、長い年月をかけてなされた中国文化・思想の受容と研究が立脚点となっていて、はじめは思想・文明の問題として考えられたものが、日本のアジア進出、大陸政策と深く結びついた政治問題として考えられるようになっている。

では、モンゴル認識はどのように形成されたのか。文化・思想的接触がほとんどなく、予備知識を持たないモンゴルに対して、なにを発端に関心が沸き起こり、その変容の契機は一体どこにあったのか。この点に関しても、日本のアジア認識の一類型として整理する意義があると考える。

本報告では、１９世紀末から作られるモンゴル認識の一つの到達点を、日本が直接にモンゴル統治に関与するようになった満洲国建国前後に設定して、そこへ至る道のりをたどる。満洲国のモンゴル統治はこの時までのモンゴル認識の結晶であるといえる。そして、さらに西の蒙疆地域へと勢力拡大を目指す中で設立された、財団法人善隣協会にも日本人のモンゴル認識が大いに注ぎ込まれている。善隣協会のモンゴル認識は、端的には次の数点にまとめられる。それは、①モンゴルの衰退を救うのは日本人であるという使命感、②衰退に追い込んだのは漢人である、③日本人とモンゴル人は同民族である、④モンゴルの地は国防上、経済上の要所である、という点である。報告では、こうしたモンゴル認識が生まれる経緯を検討する。その際に注目すべき点は、第一に、モンゴル認識の形成が、思想家よりも学者のリードによってなされたのではないか、という点である。これは、善隣協会がモンゴル情報の紹介・宣伝というモンゴル認識形成の役割と、純学術的な調査・研究を活動の主要な柱にすえることにつながっていく。第二に、当該時期の国際関係におけるモンゴルの位置づけ、すなわち、モンゴルは列強やロシアとの角逐の中で獲得すべき土地であり、中国との角逐の中で得るべき土地でもあって、二重の「周辺」といえる位置づけにあったことがモンゴル認識の形成にどのような影響を与えたのか、という点である。

## 10．シンポジウム
## 「ここから始まる私の地球――インターローカル人材が拓く未来」

**７/５（土）　15：00－17：30　講堂**

＊このシンポジウムは山口県立大学グローバル人材育成推進事業として開催し、広く一般にも公開します。

基調講演者：セリグマン・アダム博士（Adam B. Seligman、ボストン大学教授、Institute on Culture, Religion and World Affairs 代表、哲学・思想家、社会学者）。

演　　題：“Inter-cultural Exchange for Mutual Trust： Practical examples from my experiences”

内　　容：文化の対立・和解・寛容性・対話等をキーワードに、特に若者を対象としたサマースクールや The Toleration Project を通して相互理解を生み出す取組について語っていただきます。セリグマン氏のプロフィールについては http：//www.bu.edu/cura/faculty-staff/research-associates/seligman/seligmanc/ を参照ください。同時通訳有。

パ ネ ラ ー：安渓遊地（山口県立大学教授）、セリグマン・アダム（ボストン大学教授）、安田震一（多摩大学教授）、シャルコフ・ロバート（山口県立大学グローバル人材育成推進事業総括）

司　　会：斉藤　理（山口県立大学准教授）

内　　容：セリグマン氏の基調講演を受け、日本における川喜田二郎の移動大学や山口県出身の民俗学者宮本常一のフィールドワークの思想を受けた安渓遊地（山口県立大学教授）が、日本における若者交流・多世代交流・市民との対話の思想を生み出してきた場について報告を行います。その後、基調講演者やパネラーを交えて、これからの人と人との相互理解の機会創出と国際文化学の使命について議論します。

## 11．フォーラム「文化は地域や世界に希望をもたらすか？――文化交流創成コーディネーターの可能性と教育カリキュラム」

**７/６（日）　13：15－14：45　F204**

学会が取り組んできた文化交流創成コーディネーター資格認定制度が始動します。文化をつむぎ、つなぎ、てわたすという文化交流創成コーディネーターの専門性について、すでに地域社会の中にある先例を見据えつつ、現行の国際文化学カリキュラムのなかで実践できる事例を報告します。地域の中で文化交流や文化創造、文化発信等の実践活動を行ってきた学生に発表してもらい、専門的なコーディネーター資格認定には何が必要かについて考えます。学生発表について、各大学からの教員がコメントを加えます。

報告者：清水　拓（龍谷大学国際文化学部国際文化学科３年）、奈良宏美（法政大学国際文化学部国際文化学科４年）、佐藤志穂（京都文教大学国際文化学部国際文化学科卒業生）、館野帆乃花（青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科４年）、岡部有紗（佐賀大学文化教育学部欧米文化選修２年）、星山紗奈恵（プール学院大学国際文化学部国際文化学科４年）、高橋知里（山口県立大学国際文化学部国際文化学科３年）

司　会：岩野雅子（山口県立大学教授）

## 12. 100 minutes ワークショップ

**7/6（日） 15：00−16：40 F104（会議室）**

前日の基調講演者セリグマン博士（Adam B. Seligman、ボストン大学教授）による実践的なワークショップです。

参加者はフォーラム発表学生７名に加え、自由論題発表学生や学会参加学生等のなかからの希望者 20 名程度（先着順）とします。聴講は一般会員等から 20 名程度とします。

使用言語：英語

＊このワークショップは日本国際文化学会第 13 回全国大会の枠組みの中で、山口県立大学グローバル人材育成推進事業として開催します。

## 13. 情報交換会（懇親会と舞いの上演）

**7/5（土） 18：15−19：45 菜香亭 ＊バスで雪舟庭へ移動後 20：00−20：30 舞いの上演**

明治 10 年頃に料亭として創業した菜香亭は、130 年間にわたり著名人の集まる場としてにぎわってきました。伊藤博文・山県有朋・寺内正毅・田中義一・三条実美・木戸孝允・井上馨・岸信介・佐藤栄作等の揮毫が掲げられた大広間で情報交換会を行います。2004 年 10 月に、山口市の観光施設や市民交流の場、大内文化のまちづくりの拠点として生まれ変わりました。http：//www.c-able.ne.jp/~saikou/

情報交換会では、2013 年７月の大豪雨により大きな被害を受けた山口県北部の被災地からの復興にかける話も聞きながら、懇親会を進めます。JR 山口線を不通とさせた豪雨の爪痕は、沿線のリンゴ園や田畑に流れ込んだ土砂で、現在でも耕作不能地がみられます。そのなかから、ほぼ全壊した澄川酒蔵が東京等で若い女性からの絶大な人気を誇る日本酒を復活させるまでの思いと全国からの支援について話をうかがいます。

**舞い「和蝋燭の世界」 常栄寺雪舟庭**

防長四白（米、塩、紙、ろう：いずれも白いことからこう呼ばれる）とは、江戸時代に長州藩が生産を奨励した産物で、いずれも大阪の市場等に出されて大きな収入源となっていました。現在では姿を消しつつある四白の文化を、新しい形で創造したいという動きが工芸やデザイン、芸能などの分野で起こりつつあります。ハゼの実からつくられる和ろうそくの灯のもとで、山口の歴史の一端を舞いの演目で表現します。

**【構成・演出】**二代目 花柳寿寛

**【出　　演】**二代目 花柳寿寛、花柳佳枝広 他２名
山口県立大学学生有志（トコトンヤレ節＝男性６名、あかり＝女性６名）

**【司 会 進 行】**花柳寿寛福

**【演　　目】**一．創作舞踊 五重塔、二．山口県民謡 男なら、三．Re 維新 トコトンヤレ節、四．小曲 ちょうちん音頭（二以外、振付は花柳寿寛）

## 14. 総　　会

**12：10－13：10　　昼食・総会　　F204**

学会の第 13 回総会を昼食会場において開催します。2013 年度事業報告・決算報告、2014 年度事業案・予算案、2015・2016 年度理事選挙結果の報告、文化交流創成コーディネーター資格認定制度等の審議の後、第４回平野健一郎賞の授賞式があります。

## 15. 日本国際文化学会年報『インターカルチュラル 2015』（第 13 号）への投稿について

年報『インターカルチュラル』は全国大会に次いで重要な知的交流の場です。正会員はもちろんのこと、学生会員（大学院生・学部学生）にも開放されています。下記の投稿要領によりこの機会を意欲的に活用されることを期待しています。

日本国際文化学会年報編集委員会
編集委員：植野雄司（プール学院大学）　　編集委員：岡眞理子（青山学院大学）
編集委員：鈴木隆泰（山口県立大学）　　副編集委員長：山脇千賀子（文教大学）
編集委員長：若林一平（文教大学）

**【投稿要領】**

1　〆切と送付先　　投稿〆切：2014 年 8 月 20 日必着
送付先は編集委員会事務局宛
メールアドレス：intercultural2015@gmail.com
＊問合せ等も上記アドレスまで
郵送の場合は USB 等の電子媒体を同封して下記へ
〒253-8550　神奈川県茅ヶ崎市行谷 1100
文教大学国際学部山脇千賀子研究室
日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』編集委員会事務局

2　原稿分類と分量（1 枚は 400 字として計算）
（1）研究論文　50 枚以内＋欧文要旨（200 語程度）
（2）研究ノート　30 枚以内
（3）実践レポート　30 枚以内
（4）研究動向　30 枚以内
（5）書評　5～10 枚

3　審査・執筆細則等の投稿規定詳細
インターカルチュラル 12 号 156～157 ページを必ず参照してください。

# 日本国際文化学会　第１３回全国大会

**大会引き受け校**

山口県立大学

**実行委員長**

鈴木隆泰

**大会実行委員会委員（アイウエオ順）**

安渓遊地、井生文隆、井竿富雄、岩野雅子、ウィルソン・エイミー、斉藤理、重廣美由紀、安野早己

**学生スタッフ**

山口県立大学学部生、大学院生

**山口県立大学「経済社会を牽引するグローバル人材育成推進事業」**

シャルコフ・ロバート、森近慎二、田村瀬津子、藤井綾子

**協力御礼**

大会案内に香月泰男の作品を掲載するにあたり、
香月家ならびに山口県立美術館から作品掲載の許可をいただきました。

情報交換会における文化イベント『和蝋燭の世界』開催にあたり、
花柳寿寛氏・花柳寿寛福氏、ならびに雪舟庭様、山口市観光コンベンション協会様、その他多くの方々にお世話になりました。

日本国際文化学会　第１３回大会プログラム

発行日：2014 年 6 月 30 日
発行者：日本国際文化学会　第 13 回実行委員会
〒753-8502 山口県山口市桜畠 3-2-1
山口県立大学国際文化学部事務室内　日本国際文化学会事務局
第 13 回全国大会実行委員会事務局
e-mail:jsics@yamaguchi-pu.ac.jp

表紙写真：山口県立大学新キャンパス（大会会場）